【資　料】

『天国の諸庭園（*Rawḍāt al-Jannāt*）』の写本と未校訂箇所の研究*

杉　山　雅　樹

Research on the manuscripts and accounts not included in the revisions of *Rawḍāt al-Jannāt*

SUGIYAMA, Masaki

Muʻīn al-Dīn Muḥammad Isfizārī's *Rawḍāt al-Jannāt* has long been widely acclaimed in Iranian historical studies. However, the manuscripts of this work have received little attention since a critical edition of the text was published in Tehran in 1959–61. Therefore, this research examines the extant manuscripts. The purpose of this paper is to (I) classify the surviving manuscripts of the work into four groups and describe the features of each group based on differences in the total number of chapters and sections; (II) introduce the contents of the accounts that were not included in the revised text and demonstrate their historical significance; and (III) present the text of these accounts.

The defining characteristic of manuscripts in Group A is that they contain Chapter 27, which is not found in the manuscripts of the other groups. Manuscripts in Groups B and C consist of 26 chapters, but there are omissions in several sections of the manuscript in Group C. Finally, Group D includes the only manuscript containing Sections 1 and 2 of Chapter 26.

An analysis of the contents of Chapter 27 and Sections 1 and 2 of Chapter 26 shows that the author of each account is Isfizārī himself and that they contain unique information about the late Timurids. First, Chapter 27 provides information about tax items that are prohibited under Islamic law. Second, the names of 14 princes of Sulṭān Ḥusayn (r. 1469–70, 1470–1506) are included in Section 1 of Chapter 26. Third, Sulṭān Ḥusayn's architectural projects are described in Section 2 of Chapter 26. As there is little information about these subjects in the other historical sources for the late Timurids, it is obvious that the accounts not included in the revised version of *Rawḍāt al-Jannāt* have significant value.

Keywords: *Rawḍāt al-Jannāt*, Muʻīn al-Dīn Muḥammad Isfizārī, Timurid dynasty, Herāt, Codicology

キーワード： 『天国の諸庭園』，ムイーン・アッディーン・ムハンマド・イスフィザーリー，ティムール朝，ヘラート，写本研究

＊本研究は，JSPS 科学研究費補助金 JP16H05681（研究代表者：川本正知）の助成を受けたものです。

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0) license.
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

はじめに
1. 写本群
1-1. A 版写本群
1-2. B 版写本群
1-3. C 版写本群
1-4. D 版写本
1-5. 各写本群の成立時期
2. 未校訂箇所の内容とその執筆者
2-1. A 版の第 27 章
2-2. D 版の第 26 章第 1 節及び第 2 節
おわりに
［付録］『天国の諸庭園』未校訂箇所のテキスト
［校訂 1］第 27 章（結語含む），書写年の記述
［校訂 2］第 26 章第 1 節及び第 2 節

はじめに

ティムール朝（1370〜1507 年）末期を代表する文人の 1 人，ムイーン・アッディーン・ムハンマド・イスフィザーリー Muʻīn al-Dīn Muḥammad Isfizārī[1] による『ヘラートという街の特性に関する天国の諸庭園』（*Rawḍāt al-J̌annāt fī Awṣāf Madīnat Harāt*，以下『天国の諸庭園』）は，同朝の国都の 1 つとして繁栄を極めたヘラートを中心とした地理書・歴史書である。本書の前半ではヘラートを中心とするホラーサーン地方の地理的情報が，後半では古代から著者の時代に至るまでの，ヘラートを統治した支配者たちの変遷とそれぞれの時代に生じた歴史的出来事が記録されている[2]。

本書の著者イスフィザーリーは，ティムール朝ヘラート政権君主スルターン・フサイン Sulṭān Ḥusayn Mīrzā（在位 1469〜70，1470〜1506 年）治世に文書起草官（munshī）を務め，自ら起草した文書や書簡を含むインシャー作品の著者・編者としても知られた人物であった［Subtelny 1998; 杉山 2012］。彼は当時の自身の保護者であり，ティムール朝宮廷における最有力のイラン系官僚であったカワーム・アッディーン・ニザーム・アルムルク・ハーフィー Qawām al-Dīn Niẓām al-Mulk Khwāfī（1498 年没，以下ニザーム・アルムルク）[3] の指示に従い，897/1491–2 年に『天国の諸庭園』の執筆を開始し，899/1493–4 年に完成したとされる[4]。

本作品は，19 世紀後半に Barbier de Meynard によってフランス国立図書館所蔵写本を基にした作品の紹介とフランス語抄訳が発表されたことにより［Barbier de Meynard 1860; idem 1861; idem 1862］，ヨーロッパの東洋学者やイラン研究者の間では比較的古くからよく知られていた。また，近年でも，ティ

1) イスフィザーリーの没年は明らかではない。史料上確認できる彼の最後の活動は，904/1498–9 年にヘラートの金曜モスクの改修工事が終わったときに紀年詩を作成したことであった［KAK: 188; 杉山 2012: 45］。
2) 後半の歴史部分については，一貫して時代の流れに沿って話が進む訳ではない。まず，第 6 章の古代及びイスラーム初期から，第 10 章のティムール Tīmūr（在位 1370〜1405 年）によるシャー・ルフ Shāh Rukh（在位 1409〜47 年）に対するヘラートの統治権の委任までは時代順に述べられる。その後，第 11 章と第 12 章ではアッバース朝期とモンゴル時代に戻り，それぞれの時代の出来事が述べられる。次に，第 13 章では一旦シャー・ルフ治世に戻り，彼の死までの出来事が紹介される。しかし，第 14 章では再び時代が遡り，モンゴル軍によるヘラート征服とその後のヘラートの復興が扱われる。その後，第 15 章で再度シャー・ルフ死後の出来事に戻り，以降は時代順に話が進む。なお，このような順番で書かれた理由については不明である。詳細については［表 3］も参照のこと。
3) ニザーム・アルムルクを始めとする，スルターン・フサイン治世におけるイラン系官僚の活躍と宮廷での権力争いに関しては［久保 1997］を参照のこと。
4) 本作品の執筆開始年と完成年については，第 1 章第 5 節で詳しく述べる。

ムール朝第3代君主シャー・ルフ治世における都市の有力者のネットワークと政権との関わりについての研究［Manz 2007］や同朝末期ヘラート政権の社会経済的特徴を検証した研究［Subtelny 2007］，ヘラート及びホラーサーン地方の歴史的変遷を扱う研究［Noelle-Karimi 2014: 15–43］などで主要な典拠の1つとして採り上げられており，ティムール朝期のヘラートとその周辺地域を扱う研究では極めて重要な史料であり続けている。

校訂本については，これまでイランのテヘランとインドのアリーガルでそれぞれ出版されている（以下，略号としてはテヘラン版をtx1, アリーガル版をtx2で示す）。そのうち，後者のアリーガル版は現在まで第一巻しか出版されていない上に，その発行部数も少なかったらしく，入手が困難である。こうした事情もあり，これまでの研究では専ら前者のテヘラン版が利用されてきた。

テヘラン版の校訂者は，当時テヘラン大学講師（mo‘allem）であったSeyyed Moḥammad Kāẓem Emāmである。彼は，テヘランのいくつかの図書館に所蔵されている写本4点と，テヘラン大学付属中央図書館にあったフランス国立図書館所蔵写本のマイクロフィルムから写真に印刷したもの1点の，合わせて5点を基に校訂作業を行った[5)]。こうして1959–61年に2巻本として出版されたテヘラン版は，全体的な構成としては「著者による序文」と「全26の章（rawḍa）」からなる。

一方，アリーガル版は，カルカッタ大学のアラビア語・ペルシア語科教授Moḥammad Ishaqueによって，現存する『天国の諸庭園』写本のうち最も書写年が古いコルカタのアジア協会図書館所蔵写本PSC108を底本として1961年に校訂出版されたものである。しかし，先述の通りこの校訂本は未完であり，これまで第1巻（「著者による序文」から第5章の終わりまで）しか出版されていない。ただ，校訂者Ishaqueは序文の中でPSC108の冒頭部分に付された目次を掲載しており，その目次からこの写本（及びそれに基づいて出版される予定だったアリーガル版の完成版）の全体的な構成を確認することが出来る［RJI-tx2: pīshgoftār 6-11］。その中で注目すべきは，本写本にテヘラン版にはない第27章が含まれていることである。

管見の限り，『天国の諸庭園』の写本の中に第27章を含むものが存在することを最初に指摘したのはRieuであった。彼は，大英図書館所蔵の写本カタログ作成にあたって，PSC108と同じ構成を持つ同図書館所蔵のAdd16704を調査し，この写本が「全27章」からなることを紹介したのである［Rieu 1879: 207］。しかし，このRieuの指摘はほぼ等閑視され，その後発表された多くの写本カタログや研究では，本作品の章の総数は

5） ただし，マイクロフィルムの写真版を含むこれら5点に関して，校訂者Emāmは書写年代と所蔵されている図書館名しか情報を掲載しておらず，所蔵番号を示していない。筆者は各図書館のカタログと写本の照合作業を通じて，テヘラン版の校訂で使用された写本のうち，マイクロフィルム1点を除いて，テヘランの諸図書館に所蔵されている4点については特定することが出来た。テヘラン版で用いられている，アラビア文字による写本略号と，それぞれの写本が所蔵されている図書館名と所蔵番号を示すと以下の通りになる。مج=Ketābkhāne-ye Majles-e Shūrā-ye Eslāmī 2298（Majles2298），مک=Ketābkhāne-ye Mellī-ye Malek 3888（Malek3888），مد= Ketābkhāne-ye Mellī-ye Malek 382, س= Ketābkhāne-ye Madrase-ye ‘Ālī-ye Shahīd-e Moṭahharī-ye Sepahsālār 1459。このうち，後者2つは欠落があって全体の構成が把握できない上に，書写年代がヒジュラ暦13世紀／西暦18世紀後半以降のものとされるため［Derāyatī 1391kh: 934］，本稿では扱わなかった。また，Emāmは，彼が参照したというフランス国立図書館所蔵写本のマイクロフィルムの写真版について，994年ラジャブ月27日/1586年7月14日に書写されたものと述べている。しかし，同図書館のカタログには該当する写本は挙げられておらず，特定できなかった［cf. Blochet 1905: 311–312］。

「全26章」と説明されてきた[6]［Browne 1928: 174, 431; Derāyatī 1391kh: 933; Ivanow 1924: 34; Noelle-Karimi 2014: 16; Storey 1970: 355; Subtelny 1998］。唯一の例外として，Storey 1970 をロシア語に訳した上でそこに新たな情報を加えた Bregel' を挙げることが出来る。彼は，本作品については「26〔もしくは 27 章〕に分かれている」[7] と紹介しており［Bregel' 1972: 1046］，簡単ではあるが第 27 章の存在に言及している。しかしながら，Bregel' が指摘した後も，第 27 章の存在や内容が検証の対象とされることはなく，本作品の現存写本に見られる章の総数や構成の違いに基づく総合的な調査が行われることもなかった。

かく言う筆者も，以前は『天国の諸庭園』を読む際には専らテヘラン版を利用しており，章の総数が異なる写本が存在することすら知らなかった。やがて，2016 年に筆者がコルカタのアジア協会図書館を訪れた際，偶々 PSC108 を実見する機会を得て，そこに第 27 章が含まれていることを知った[8]。さらにその後，世界各地の様々な図書館で『天国の諸庭園』の写本調査を行った結果，本作品の写本にはいくつかのバージョンが存在し，それに基づいて複数の写本群に分類することが可能であること，また前述の第 27 章だけでなく，他にもこれまで未校訂の箇所が存在すること，が明らかになった。

以上のことから，本稿は，(1) これまでの写本調査によって得られた情報を基に，『天国の諸庭園』の写本群を提示し，それぞれの写本群間の相違点を明らかにすること，(2) これまで校訂されてこなかった章及びその下位区分となる節（chaman）に含まれる情報に基づいてその執筆者を検証すると共に，当該箇所の内容の概要を紹介し，その史料的価値を指摘すること，(3) 上記のように，これまで一部でしか知られていなかった章及び節の校訂作業を行い，テキストを提示すること，を目的とする。以下では，上記の目的のうち (1) と (2) をそれぞれ第 1 章と第 2 章で扱い，(3) については本稿の最後に付録として校訂テキストを掲載する。

1. 写本群

本章では，これまで著者が行ってきた写本調査の成果に基づき，『天国の諸庭園』の現存する写本の中で全体の構成が確認でき，かつ比較的書写年代が古いものをいくつかの写本群に分類し，それぞれの特徴を提示する。具体的な説明に入る前に，まずは『天国の諸庭園』の写本の現存状況を確認しておきたい。

世界各地に現存するペルシア語写本を網羅的に紹介した Storey のペルシア語写本カタログでは，本作品の写本として計 18 件が挙げられている。そのうち，書写年が記録され

6) 例えば，Browne は『ペルシア文学史』の中で本作品を紹介する際，Rieu による大英図書館所蔵ペルシア語写本カタログの記述のうち，Add16704 が第 27 章を含むことが指摘されている箇所を典拠として挙げながら，本作品の構成について「26 章に分けられている」としか述べていない［Browne 1928: 430］。また，Ivanow も，コルカタのアジア協会図書館のペルシア語写本カタログにおいて，第 27 章を含む PSC108 の構成について誤って「26 の章に分けられている」と記録している［Ivanow 1924: 34］。

7) 引用文中の〔〕内の文言が，Storey［1970: 355］に対する Bregel' による追加情報である。ただし，追加情報の典拠は示されていない。恐らく，先述の Rieu の解説またはアリーガル版の校訂者による序文の記述のどちらかに基づいたものと思われる。

8) この図書館での調査は，JSPS 科研費 JP16H05681「ラシード・ウッディーン『歴史集成』写本のミニアチュールの総合的研究」（2016–2018 年，研究代表者：川本正知）に関連して実施したものである。なお，本稿の基になった写本調査は，この科研費に関連した調査のために世界各地の様々な図書館を訪れた際，その作業が終了した後に行ったものである。研究代表者である川本正知先生を始め，本科研に参加された研究分担者や研究協力者の方々には，各地の図書館を利用する際の便宜を図っていただいた他，様々な助言や助力を賜った。ここに記して謝する。

ていて，本作品の完成からおよそ1世紀の間に，すなわち16世紀中に書写されたことが確実なものは，5件である[9]［Storey 1970: 355］。次に，Bregel’はStoreyの提示した本作品の写本に新たに12件を加えているが，そのうち16世紀中に書写されたものは1件である[10]［Bregel’ 1972: 1046–1047］。また，近年イランの様々な図書館の写本カタログを基に総合的なカタログを編纂したDerāyatīは，イランの諸図書館には本作品の写本が合計15件所蔵されていること，そのうち16世紀に書写されたことが確実なものとして4件あること，を報告している[11]［Derāyatī 1391kh: 933–934］。以上の3つの写本カタログの記述をまとめ，それぞれ重複しているものを除くと，『天国の諸庭園』の現存する写本のうち，16世紀に書写されたことが確実なものは合計9件になる。

筆者はこれまでに上記の9件のうち8件について，それぞれを所蔵する図書館に赴いて調査を行ってきた。その結果，『天国の諸庭園』の写本の中には，章の総数の違い，すなわち全26章かあるいは全27章かという違いだけではなく，序文や章の一部，または章の下位区分にあたる節の全体あるいはその一部が省略されているものが存在すること，以下に挙げる3つの項目に基づくと，16世紀に書写された『天国の諸庭園』の写本8件は3つの写本群に分類できること，が判明した[12]。分類のために用いた項目とは，①第27章（結語含む）及び序文での「ミール・アリー・シールMīr ‘Alī Shīr（1501年没）[13]の権勢に関する祈願」の有無，②第24章冒頭部[14]の有無，③テヘラン版の構成に基づくと第18章第1節，第23章第1節及び第2節，第24章第1節に相当する記述の有無，の3点である。本稿では，これら3つの写本群にはそれぞれ親写本に相当するものが存在していたと想定し，便宜上，それらの親写本が示すバージョンをA版，B版，C版と呼ぶ。また，上記3つの親写本のいずれかに基づいて作成され，共通する内容を持つ複数の写本をまとめて，それぞれA版写本群，B版写本群，C版写本群と呼ぶ。

9）本稿における写本略号で示すと，PSC108，IO195，Or4106，Add22380，Add16704である。

10）前掲注のStorey 1970で挙げられている5件に，Majles2298が加えられている。

11）項目としては16件挙げられているが，うち1件はテヘラン大学中央図書館に所蔵されているパリの国立図書館所蔵写本P. 105のマイクロフィルムの説明であるため，ここでは除外した。なお，ここでの4件とは，Bregel’が挙げているMajles2298の他，Malek3888とDaneshgah5453，及び本稿では扱えなかったArākのOstād-e Ebrāhīm Dehgān図書館所蔵写本（所蔵番号100）である。

12）写本間で節の全体またはその一部が省略されて分量が異なることについては，既にテヘラン版の校訂者であるEmāmが自ら参照した写本間の相違に基づいて指摘している［RJI-tx1, v.2: pīshgoftār 43–44］。しかし，彼はA版写本の存在を知らなかったためか，Majles2298を『天国の諸庭園』の最も完成された写本とみなしている。また，Majles2298と同じ構成を持つ写本が他にも存在することについても知らず，そもそも複数の写本群の存在を前提とした議論は行っていない。

13）スルターン・フサインの側近として政府・宮廷に大きな影響力を有しただけでなく，チャガタイ・トルコ語文学の確立者として，また学芸保護者として，ティムール朝末期のヘラートにおける文化的発展に大きな貢献を果たした。ミール・アリー・シールが行った学芸保護の実態については［久保 1990］，彼の家系や出自については［久保 2012; 久保 2014］を参照のこと。ただし，イスフィザーリーがミール・アリー・シールと具体的にどのような関係にあったのかは不明である［杉山 2012: 45–47］。

14）本稿では，便宜上，章タイトルの後，第1節の節タイトルの前に記述がある場合，それを「冒頭部」と呼ぶ。なお，『天国の諸庭園』の各章の構成はそれぞれ異なり，章によって節を持つものと持たないもの，または冒頭部を持つものと持たないものがある。各章の構成を示すと，大きく分けて以下の3つとなる（下線を引いた章は，その構成が写本群によって異なることを示す。詳細については［表3］も参照のこと）。①節に分けられていない章（第1, 9, 10, 12, 19, 21, <u>26</u>, <u>27</u>章），②冒頭部がある章（第8, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 20, 22, 23, <u>24</u>, 25, <u>26</u>章），③冒頭部がない章（第2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, <u>24</u>章）。

さらに，書写年は不明ながら17世紀以降に書写されたことが確実な写本の中に，他の写本群では確認できない，④第26章第1節及び第2節を含むものが存在する。そのため，これをD版写本として別に分類した[15)]。

続いて，以下では各写本群の特徴を確認し，その後各写本群の成立時期について現時点での見解を述べたい[16)]。

1-1. A版写本群

この写本群の特徴は，他の写本群にはみられない，第27章と序文の「ミール・アリー・シールの権勢に関する祈願」を含んでいることである。また，第27章の終わりには結語にあたるものが書かれており，本作品の最も完成された構成を有しているといえる[17)]。さらに，他の写本群と比べた場合，全体的により適切と思われる単語や表現が使用されている[18)]。

現在のところ，A版写本群に属す写本は，コルカタのアジア協会図書館所蔵PSC108（［表2］①）と大英図書館所蔵Add16704（同②）の2つしか確認出来ていない。前者のPSC108については，現存する『天国の諸庭園』写本のうち最も書写年代が古く，ティムール朝滅亡の前年にあたる911/1506年に書写されたものである。作成地は不明であるが，本作品そのものが完成したとされる年からおよそ12年後とかなり早い時期に書写されていることからも，ヘラートで作成された可能性が高いと考えられる。流麗なナスフ体で書かれ，章や節のタイトルには赤色と青色のインク，引用されている詩の作者の名前には赤色と青色の他に金色のインクが使用されるなど，全体として非常に精巧に作成された豪華な写本である[19)]。なお，作成地だけでなく，写字生の名前，所有者や所在地の変遷，アジア協会図書館に所蔵されるようになった経緯など，写本の来歴に関する情報は一切不明である。

このPSC108の来歴について考える上でヒントを与えてくれそうなものが，A版写本群に属すもう1つの写本Add16704である。1002/1594年に書写されたこちらの写本は，PSC108と比べると明らかな書き間違いがいくつか含まれており，やや質は落ちる。また，

15）以上挙げたような写本群を設定する際の基準と各写本群の対応については［表1］に，著者が調査を行ってきた写本がどの写本群に分類されるかについては［表2］に，各写本群の構成の目次については［表3］に，それぞれ示しておいた。

16）なお，『天国の諸庭園』の2つの校訂本でそれぞれ底本とされているのは，アリーガル版（tx2）ではA版写本PSC108，テヘラン版（tx1）ではB版写本Majles2298である。また，本稿で扱った写本の中でそれぞれの校訂本の作成作業において参照されたものとしては，アリーガル版ではもう1つのA版写本Add16704とB版写本IO195，テヘラン版ではC版写本Malek3888がある。

17）A版以外の写本では，第26章の最後にスルターン・フサイン治世に多くの死地が開墾されたことを散文と韻文で述べた後，書写年が提示されて突然終わりを迎える（［表3］も参照のこと）。作品の最後としてはあまりにも唐突であり，著者が予定していた本来の終わり方は別にあったとみなすべきであろう。

18）ここでは一例だけ挙げておきたい。テヘラン版（及びその底本となったMajles2298）やその他の写本群では，本来「望みを叶える王子たちの権勢と長命に関する祈願」とすべき序文の節のタイトルのうち「長命（jāndirāzī）」の部分がいずれも「jāndārī」となっている［Daneshgah5745: 5b; Majles2298: 11; Malek3888: 33b］。この語の解釈については，複合名詞を構成する2つの単語の意味から判断すると，「活力の溢れた状態」という意味でとれなくもないが，筆者は歴史史料においてこの語がそのような意味で用いられた例を寡聞にして知らない。また，テヘラン版の校訂者であるEmāmは，この語が本来「護衛」を意味することを紹介した上で，そこから転じて「友情，援助」の意で使用されている，とやや苦しい解釈を施している［RJI-tx1: v. 1, 13, n. 1］。それに対して，A版写本群に属する2写本のみ，これを「長命」と記録しており［Add16704: 11b; PSC108: 7a］，単語の並びから考えてもこちらの方がより相応しいと思われる。

19）ただし，本文開始葉の冒頭に置かれているウンワーンは装飾が施されておらず，最終的な完成には至らなかったようである。また，湿度や虫食いの影響により，現在はかなり劣化が進んでいる。

PSC108 と同じく，その作成地や最終的に大英図書館に所蔵されるに至った詳細な経歴は不明であるが，少なくとも一時期ムガル朝の宮廷図書館に所蔵されていたことは間違いない[20]。

残念ながら，PSC108 と Add16704 との具体的な参照関係については明らかではない。ただ，その経緯についての詳細は不明であるが，前者は現在コルカタの図書館に所蔵され，後者はかつてムガル朝宮廷図書館に所蔵されていたことから，A 群写本群に属する 2 写本ともインドという地と深い関わりがあるといえる。Add 16704 の中にこの写本の成立地や基にされた写本の情報が含まれていないため，あくまでも推測の域は出ないものの，Add16704 がムガル朝宮廷で書写されたものであり，その際親写本とされたのがかつてヘラートで作成された後にインドへもたらされた PSC108 であった可能性は十分にあるだろう。

1-2. B 版写本群

この写本群に属す写本は，A 版写本とは異なり，序文の「ミール・アリー・シールの権勢に関する祈願」と結語を含む第 27 章がなく，全 26 章からなる。この写本群にはテヘラン版の底本となったイラン議会図書館所蔵写本 Majles2298（［表 2］④）[21] が含まれていることから，B 版写本は一般的に最もよく知られた『天国の諸庭園』の構成を有しているといえる。この写本群に属すのは，Majles2298 の他，インディア・オフィス図書館所蔵（現在は大英図書館所蔵）IO195（同③），大英図書館所蔵 Or4106（同⑤）の計 3 点であるが，いずれも作成地は不明であり，それぞれの写本の参照関係も明らかではない。なお，この 3 写本のうち，IO195 は A 版写本群に属する PSC108 の完成から約 8 年後の 920/1514 年に書写されたものであり，本作品の現存する写本の中では 2 番目の古さである。このことから，この B 版写本群の親写本にあたるものも古くから存在していたと考えられる。

さらに，上述の 3 写本を詳細に確認すると，IO195 及び Majles2298 と，Or4106 という 2 つのグループに分けることができる。その違いは，前者 2 つの写本に存在する第 24 章冒頭部の大部分が，後者では書かれておらず，その箇所が空白のままにされていることである[22]。そのため，3 つ目の Or4106 のみ B-1 として前者 2 つとは区別しておく。

では，B-1 で空白にされた第 24 章冒頭部の該当箇所には，何が書かれているのであろうか。この箇所で最初に描かれているの

20）この写本の最初の葉には，いくつもの内容確認（‘arḍ）の記録と印章が記されている。その中で年代が最も古いのは，「Amānat Khān Shāh Jahānī，1042（1632–3 年）」［Add16704: 2a］というものである［Rieu 1879: 207］。この人物は，ムガル朝第 5 代君主 Shāh Jahān（在位 1628～58 年）に仕えた能書家 ‘Abd al-Ḥaqq Amānat Khān Shīrāzī（1644–5 年没）のことである［Begley 1989］。さらに，数葉後には「〔1〕107 年ラビーユ II 月 7 日（1695 年 11 月 15 日）にデリーの街で帝王様（sarkār-i pādshāhī）から購入した。所有者（mālik-hu）」［Add16704: 6a］という記述がある。ここでの「所有者」が誰を指しているかは明らかではないが，この文言は彼が当時の「デリーの街」の「帝王」，すなわちムガル朝第 6 代君主 Awrangzēb（在位 1658～1707 年）からこの写本を購入したことを意味していると考えられる。以上のことから，この写本はかつてムガル朝の宮廷図書館に所蔵されていたが，売買を通じて世に出たものとみなすことが出来る。

21）イランの図書館に所蔵されている写本には，葉数ではなく頁数が書き込まれていることが多い。そのため，本稿でイランの図書館に所蔵されている写本の葉数を挙げる際には，写本の開始頁を 1b として筆者が自ら付した葉数を利用する。

22）具体的には，Or4106 では，380b の冒頭にテヘラン版の第 23 章第 3 節の最後にあたる文章が 3 行書かれた後，380b の残りと 381a の全体が空白になっている。そして，381b は第 24 章冒頭部の途中（テヘラン版 330 頁 3 行目にあたる文章）から始まっており，全体としては第 24 章冒頭部のおよそ 4 分の 3 が省略されていることになる。Or4106 では他にこのような空白部分は存在しないことからも，書写した人物が第 24 章冒頭部の大部分の執筆を意図的に避けた可能性は極めて高い。

は，873/1469年にスルターン・フサインがヘラートで1度目の即位をした際の逸話である[23]。以下にその一部を，A版写本（PSC108）と，B版写本に基づいて校訂されたテヘラン版から引用しよう。

シーア派の無知な者たちとラーフィダ派の偽りの者たち（jāhilān-i Shī‘a wa bāṭilān-i Rafḍa）は，かの陛下（＝スルターン・フサイン）が雄弁なる〔自身の〕詩で「フサイニー」という筆名を使用しているのは，彼らの偽りの信仰に傾倒しているからであり，輝やかしいスンナ派は非難の対象となるであろう，と考えた。そして，イスラームのミンバルの上で12人のイマームの名でフトバを読み，正統カリフの名を排除しようと，度を越えた主張や中傷を行った。その1人が，Sayyid Abū al-Ḥasan Karbalā’ī[24]という名の人物であった。彼は，至高なる陛下の天空の広がりを持つ宮廷の絨毯がまだ優れた学者たちや公正な学識者たちで飾られていなかった頃に，欺瞞と狡猾さによって日々の糧を得る術を手に入れ，カリフ位の避難所たる宮廷へと向かった。そして，虚偽と策謀によって〔そこに〕入り込み，上記のこと（12人のイマームの名でフトバを読ませること）に関して多大な努力を払ったのである。［PSC108: 385b; RJI- tx1: v.2, 328］

以上のように，この箇所で最初に語られているのは，スルターン・フサインの周辺にいたシーア派の集団が，フトバを十二イマーム派のやり方に変更するよう彼に働きかけたという逸話であった。さらに続いて，シーア派に転向したカーイン出身の説教師Sayyid ‘Alī Wāḥid al-‘Aynなる人物によって引き起こされた混乱について述べられている。それによれば，この説教師が犠牲祭の日にスンナ派を攻撃する説教を行ったことに反発したヘラート住民が暴動を起こし，スルターン・フサインの命でその説教師がミンバルから引き摺り降ろされたことで事態は収束した，という[25]［IO195: 249a–249b; RJI-tx1: v.2, 329–330］。いずれの逸話もシーア派信仰に関わる事件であったが，結果的にスルターン・フサインがスンナ派支持の立場を採り厳正に対処したことで問題は解決したとされている。このように，第24章冒頭部の記述は，スルターン・フサインが「清浄な」スンナ派信仰を有することを強調するためのものであったといえる。

では，なぜB-1写本Or4106では，第24章冒頭部のうち上記のようなシーア派信仰に関わる出来事の記述が省略されているのだろうか。その原因を考える上で，この箇所が意図的に空白のままにされていることに注目すべきである。つまり，この箇所を省略した背景には，先述の引用箇所に見られるような，シーア派に対する否定的な記述を避ける

23）スルターン・フサインは873/1469年にヘラートでの即位を果たしたが，それから約15か月後に，アク・コユンル朝の支援を受けたティムール朝王子の1人ヤードガール・ムハンマドYādgār Muḥammadによってヘラートを征服され，ホラーサーンの統治権を奪われた。その後，スルターン・フサインは875/1970年にヘラートの奪還に成功し，ヤードガール・ムハンマドを処刑した後，2度目の即位を果たしている［Subtelny 2007: 63–67］。

24）この人物の名前については，B版写本及びテヘラン版校訂本ではSayyid Ḥasan Karbalā’īとなっているが，A版写本（PSC108）の記述に従った。同様の逸話を伝える同時代史料『ジャーミー伝（*Maqāmāt-i J̌āmī*）』（1492年完成）でもA版写本と同じくSayyid Abū al-Ḥasan Karbalā’īとされており［MJB: 148, 190］，こちらの名前の方がより信憑性が高いと考えられるからである。なお，スルターン・フサイン治世最初期のヘラートで完成した年代記『両星の上昇（*Maṭla‘-i Sa‘dayn*）』（1470年完成，1480～90年頃修正）でもほぼ同じ内容が記録されているが，あくまでも集団としてのみ扱われており，個人名には言及されていない［MSS4: 1021–1022］。

25）この出来事についても，『ジャーミー伝』と『両星の上昇』には同様の記述が残されている［MSS: 1022; MJB: 149–150, 190］。

狙いがあったと考えられる。以上のことから，Or4106 はシーア派を国教とするサファヴィー朝の支配領域で作成された可能性が高いといえるだろう[26]。

1-3. C 版写本群

この写本群に属する写本としては，マレク図書館所蔵 Malek3888（［表 2］⑥），テヘラン大学図書館所蔵 Daneshgah5453（同⑦），大英図書館所蔵 Add22380（同⑧）がある。これまで述べてきた A 版及び B 版写本と比べた場合，この C 版写本の特徴としては，以下の 3 点が挙げられる。1 点目は，B 版写本と同じく全 26 章から構成されていることであり，この点で全 27 章からなる A 版写本とは異なる。2 点目は，第 24 章冒頭部が省略されていることである。これについては，一見 B-1 と共通しているように見えるが，実際には異なる。というのは，B-1 では冒頭部の一部は残され，省略された部分は空白のままにされているのに対して，C 版写本では同章冒頭部は完全に削除され，空白部分は詰めて書かれているからである。3 点目は，その他の節でも全体または一部が省略されていることである。A・B 版写本，及びテヘラン版の構成を用いて，C 版写本群で共通して全体が省略されている節を示すと，第 18 章第 1 節，第 23 章第 1 節及び第 2 節，第 24 章第 1 節となる[27]。

なお，以上挙げたような C 版写本群に属する 3 つの写本に関しても，作成地や所有者など来歴に関する詳しい情報は不明である。

1-4. D 版写本

これまで述べてきた写本群は全て 16 世紀に書写されたことが確実なものであったのに対し，最後に挙げる D 版写本にあたるものは明らかに後世に書写されたテヘラン大学所蔵 Daneshgah5745（［表 2］⑨）である[28]。書写年代が新しいにもかかわらず，あえてここで採り上げる理由は，この写本には他の写本バージョンでは全く確認できない，第 26

26）スルターン・フサイン即位直後のフトバ変更の逸話に関しては，サファヴィー朝支配下のヘラートで編纂されたホンダミール Khwāndamīr（1535 年没）の『道徳の伴侶（*Ḥabīb al-Siyar*）』（1523～24 年頃完成，1529 年追加・修正）のように，変更の理由についてティムール朝期に編纂された史料とは全く異なる記述になっているものがある。すなわち，『道徳の伴侶』では，スルターン・フサインにフトバの変更を勧めるシーア派の集団は登場せず，この変更はあくまでもスルターン・フサイン自身の宗教的傾向によるものであったとされている。さらに，この試みを阻止すべく彼を説得した人々に対して「狂信的なハナフィー派の一団（jamʿī az mutaʿaṣṣibān-i madhhab-i Ḥanafī）」と否定的な表現が用いられている［HSK4: 136］。スルターン・フサイン治世初期の歴史を記述するにあたって，ホンダミールが『両星の上昇』や『天国の諸庭園』を参考にしたことは間違いないと考えられる。それにもかかわらず『道徳の伴侶』で上記のような記述になっているのは，ホンダミールがスルターン・フサインのフトバ変更に関する記述をサファヴィー朝の宗教的立場に反しない内容に変更したためであったと思われる。

27）また，筆者が確認できた範囲ではあるが，C 版写本ではそれ以外にも，他の写本群で第 17 章第 3 節と第 20 章第 1 節及び第 2 節に相当する箇所で，一部省略がみられる。なお，C 版写本群に属する 3 つの写本を比較した場合，第 20 章第 1 節及び第 2 節における記述内容や分量がそれぞれ異なる。このことから，今後，後世に書写された写本を含めて分析を進めていけば，第 20 章第 2 節の記述内容や分量に基づいて C 版写本群をさらに細分化することが可能と思われる。しかし，本稿では煩雑になるのを避けるため，写本群の分類はあくまでも章や節の総数に基づくものとし，上記の 3 写本を全て同じ C 版写本として扱う。

28）写本の最終葉には，本文が書かれている枠の外に本文とは違う筆跡で「1187 年ムハッラム月（1773 年 3 月 25 日～4 月 23 日）」という日付を含むアラビア語の文章が書かれている。この文章は通常書写年を示すときに使用される定型句とは全く異なるものであり，意味が捉えにくい。テヘラン大学中央図書館写本カタログによれば，この文章は読誦（qirāʾat）の記録を示しているに過ぎず，写本が書写された年代は 1187 年よりも古い，という［Dāneshpazhūh 1357kh.: 81–82］。書写年を示す文章は定型句を使用して本文の中に書かれることが多いことから，写本カタログで指摘されているように，この文章が示しているのは書写年ではない可能性が高い。

章第1節及び第2節が含まれているからである。この写本が有するその他の特徴としては，C版写本と同じく第24章冒頭部は全く存在しないこと，これまで指摘した点以外の全体の構成についてはB版写本と全く同じであること，が挙げられる。

なお，最初に挙げた第26章第1節及び第2節に関しては，イスラーム議会図書館の写本目録において，同図書館に所蔵されている別の写本（Majles2298）の解説として以下のような記述がある。

「〔この写本を〕書写した人物は写本の終わりに，第26章を〔『天国の諸庭園』の〕他の複数の写本にある〔ように,〕2つの節（第1節と第2節）を含んだ〔形では〕書かなかった」［Nafīsī 1344kh: 256］

極めて簡潔な表現のためかなり補って読む必要があるが，引用した記述は『天国の諸庭園』の現存する写本の中に第26章第1節及び第2節を含むものが複数存在していることを示している。残念ながら，ここで述べられている「他の複数の写本」について，所蔵する図書館やその番号など具体的な情報はなく，詳細は一切不明である。また，筆者自身がこれまでの写本調査で発見出来た第26章第1節及び第2節を含む写本はこのDaneshgah5745のみであり，実際に同じ構成を持つ写本が他にも存在するかどうかは現段階では明らかではない。

1-5. 各写本群の成立時期

以上，各写本群とそれぞれの特徴について説明してきたが，最後にこれまで述べてきたような4つの写本群が成立した順番，つまり各写本群の基となる，それぞれの親写本に相当するものが完成した時期についても触れておきたい。

結論から述べると，現時点ではそれぞれの写本群が成立した順番を特定し，写本バージョン間の関係を明らかにすることは不可能である[29)]。その理由としては，A版写本を除いて，各写本バージョンの中にそれぞれの親写本が成立した年代を確定できるような独自の記述は書かれていないからである。

唯一の例外であるA版写本には，この写本バージョンの成立年を示唆する記述が含まれている。以下では具体的な説明に入る前に，まず全ての写本バージョンに共通してみられる記述を基に，『天国の諸庭園』という作品そのものの執筆年に関する情報をまとめておきたい。

「はじめに」で述べた通り，本作品の執筆が始まったのは序文に「現在」の年として明記されている897/1491–2年であったと考えられる［RJI-tx1: v. 1, 33; tx2: 28］。その後，第5章第2節には，ティムール朝末期を代表するペルシア語詩人であり，著名なスーフィー・シャイフであった ‘Abd al-Raḥmān Jāmī が898年ムハッラム月18日（1492年11月18日）[30)] に亡くなったとき，この箇所を執筆中であったことが記されている［RJI-tx1: v. 1, 235; tx2: 177］。さらに，第23章第

29）テヘラン版の校訂者 Emām は，Malek3888 が 899/1493–4 年に完成した本作品の不十分な第1稿に基づいて作成された写本であり，その後イスフィザーリー自身が情報を書き加える過程で他の写本が生まれ，最終的に Majles2298 が完成した，と述べている［RJI-tx1, v.2: pīshgoftār 43–44］。現時点ではこの Emām の説を完全に否定することは出来ないが，彼がそのように結論付けた具体的な根拠を全く示していないことと，彼が最も完成された形に近いA版写本の存在を知らず，B版写本を最終稿とみなしているため，全体として説得力を欠いていることから，そのまま受け入れる訳にはいかない。

30）ジャーミーが898年ムハッラム月18日に死去したことについては，他の史料にも記録されている［HSK: 338］。なお，従来の研究では，この日付は「1492年11月9日」にあたるとされ，これが西暦に換算した場合のジャーミーの没年月日として広く知られてきた［cf. Huart 1991: 421; Losensky 2008: 470］。しかし，この換算は誤りであり，正しくは「9日」ではなく「18日」である。

1 節には，「898 という年（1492–3 年）が過ぎている」時期に執筆していたことが述べられている[31]［RJI-tx1: v.2, 318］。

次に作品が完成した年についてであるが，実は作中ではその年は明記されていない。校訂者による前書きを始めとする先行研究では，作品の完成年は 899/1493–4 年とされているものの[32]［RJI-tx1, v.1: pīshgoftār 20; ibid. v.2: pīshgoftār 43; RJI-tx2: 26–29; Bregel' 1972: 1046; Manz 2007: 62］，その具体的な根拠を挙げているのはアリーガル版の校訂者 Ishaque のみである。彼が根拠として提示したのは，A 版写本にのみ存在する，以下のような結語の記述であった。

> この書（ajzā'）は長くなってしまったので，以下のようにするのがふさわしい。至高なる陛下や王子たち，一部のアミールたちによる楽園のような建築物の描写，かの恩恵の避難所たる帝王がカリフ位に就いていためでたい時代に行われた大きな宴や祝宴の説明，900 年（1494–5 年）の初め以降のその他の出来事や珍しいことの説明は，時が猶予を与え，〔私の命の〕期限が延びるのであれば，帝王陛下の権勢の支援によって別の巻（daftar）に書かれ，明らかにされるであろう。［PSC108: 406a–b］

この引用文は，一見すると『天国の諸庭園』には 899 年までの歴史が書かれており，それ以降，つまり 900 年以降の出来事は別の巻にまとめるという執筆者イスフィザーリーの構想が述べられているように見える[33]。しかし，実際に本作品で扱われているのは 875/1470 年のスルターン・フサインによるヘラートでの 2 度目の即位までであり，それ以降に起きた事件は一切記録されていない。つまり，「900 年」という年は，本作品で扱われている歴史的出来事の記述とは全く関係がないのである。このことから，Ishaque が指摘している通り，この「900 年」は本作品がそれまでに完成していたこと，つまり 899 年中に執筆が完了していたことを示しており，イスフィザーリーは結語において作品が完成した年の翌年にあたる 900 年を基準として今後の構想を提示した，と解釈すべきであろう［RJI-tx2: 28–29］。むしろそのように解釈しないと，作中の歴史叙述とは全く関係のない「900 年」という年号が突然現れる理由を説明できない。また，先述の通り，898 年に第 23 章第 1 節を執筆中であったことも，この解釈の妥当性を裏付けるものであろう。以上のように，従来の研究において本作品の完成年とされる 899/1493–4 年は，A 版写本の記述からのみ導き出せるものであり[34]，実際には本作品の最終稿というべき A 版写本の成立年に相当するとみなすことができる。

次に，成立年を特定できた A 版写本を軸として，他の写本バージョンとの関係を検討してみたい。中でも，2 番目に書写年代の古い写本が属す B 版写本群については，A 版写本と比べた場合，序文の「ミール・アリー・シールの権勢に関する祈願」と第 27 章が含まれていないという違いはあるものの，その他は基本的に同じ構成を有している。このことから，B 版写本は A 版写本との間に何ら

31）C 版写本群に属する写本では，他の写本バージョンで第 23 章第 1 節にあたる部分は省略されているため，この記述は書かれていない。

32）Browne は本作品の完成年を 875/1470 年としているが［Browne 1928: 431］，明らかに誤りである。後述するように，この年は作品の中で扱われている最も新しい歴史的出来事の年を示しているに過ぎない。また，序文などを見れば，本作品が 897/1491–2 年以降に執筆されたことは明らかである。

33）A 版写本にのみ存在する，結語を含む第 27 章を執筆したのは，本作の著者イスフィザーリー自身であったと考えられる。このことについては，次章で詳しく説明する。

34）テヘラン版の校訂者 Emām は，A 版写本の存在を知らなかったはずであるが，なぜか本作品の完成年を 899/1493–4 年としている［RJI-tx1, v.1: pīshgoftār 20; ibid. v.2: pīshgoftār 43］。しかし，根拠を一切示していないため，彼がこの年を挙げた理由については不明である。

かの参照関係があったと考えられる。この仮定に基づき，B 版写本の成立過程を考えてみた場合，以下のような 2 つの可能性が浮かぶ。1 つ目は，899/1493–4 年に最も完全な構成を持つ A 版写本が最初に完成し，その後そこから序文の「ミール・アリー・シールの権勢に関する祈願」と第 27 章が省略されて B 版写本が成立した，というものである。2 つ目は，第 23 章第 1 節を執筆中であった 898/1492–3 年以降に一旦 B 版写本が成立し，そこに新たに序文の一部と第 27 章が追加されて 899/1493–4 年に完成稿としての A 版写本が成立した，というものである。しかし，B 版写本に成立時期を特定できるような記述が残されていないため，どちらか一方に確定することは不可能である。さらに，A・B 版写本に比べて，複数の節が存在せず，全体の構成が異なる C 版写本や，後世に書写された写本 1 点のみが現存する D 版写本については，その成立時期や他の写本群との参照関係を検証することはより困難になる。

以上のように，各写本群の成立については，残念ながら現時点では明らかにすることは出来ない。この点に関しては，今後新たな写本調査を通じて検証する必要があるだろう。

2. 未校訂箇所の内容とその執筆者

本章では，『天国の諸庭園』諸写本に含まれる未校訂の章や節の記述について，それぞれの内容を簡単に紹介すると共に，それらを執筆した人物がイスフィザーリーであるとみなしうるか否かを検証する。さらにその上で，それぞれの史料的価値についても指摘しておきたい。以下では，まず A 版写本にのみ含まれる第 27 章について[35]，続いて D 版写本にのみ含まれる第 26 章第 1 節及び第 2 節について，それぞれ述べよう。

2-1. A 版の第 27 章

第 27 章で扱われている内容は，スルターン・フサインによるイスラーム法に反する諸税の廃止，及びその他の善行に関する逸話である。本節では，まずはこの第 27 章を執筆したのは誰か，という問題を検証したい。前章で述べた通り，899/1493–4 年にイスフィザーリーが書き上げた本作品の最終稿が A 版にあたると考えられるため，当然ながらこの写本群に含まれる第 27 章の執筆者はイスフィザーリーである可能性が高いと思われる。しかしながら，他の写本バージョンではこの第 27 章が一切扱われていないこと，また，あくまでも仮定の話になるが，我々が A 版とみなすバージョンには元々第 27 章は含まれておらず，後に別の人物の手によって挿入されて PSC108 が，あるいはその親写本にあたるものが完成した，という可能性を全く否定することもできないことから，念のためこの箇所の執筆者について検証しておきたい。ただし，結論を先に述べておくと，以下に挙げる 2 つの根拠に基づき，第 27 章を執筆したのはやはりイスフィザーリーであったとみなすことができる。

1 つ目の根拠は，『天国の諸庭園』序文の「本書執筆の理由」にある記述との整合性である。この箇所では，イスフィザーリーが当時最も有力なイラン系官僚であったニザーム・アルムルクから以下のような書物の執筆を命じられたことが記されている。

「… 神聖なる街ヘラートの情勢と特性の説明に関して〔中略〕一冊の書が書かれる

35）前章で述べた通り，A 版写本が有する他の写本バージョンとの違いとしては，全 27 章から構成されていることだけでなく，序文に「ミール・アリー・シールの権勢に関する祈願」が含まれていることも挙げることができる。しかし，A 版写本の序文部分に関しては，既にアリーガル版で校訂出版されていること［RJI-tx2: 15–16］，またその内容に執筆者の特定につながるような記述や特筆すべき新たな情報は見出せなかったこと，という 2 つの理由から，本稿では扱わない。

べきである。文章の誇張というしきたりを免れ，隠喩の難解さという装いを脱ぎ捨てつつ，スルターンの慈善の徴（āthār-i khayrāt-i Sulṭānī）を含み，カリフの地位にある陛下の慈愛と愛情の幸運によってこの清浄なる街に生じた繁栄と隆盛の説明を含む書が」。［RJI-tx1: v. 1, 48–50; tx2: 37］

以上のように，ニザーム・アルムルクは，単にヘラートに関してだけでなく，「スルターン・フサインの慈善の徴」やスルターン・フサイン治世のヘラートの繁栄についても記述するよう明確に指示している。しかし，A 版写本群以外の写本（及びテヘラン版）で，スルターン・フサイン治世に関する記述に相当するのは第 23 章から第 26 章までであり，その中で彼の具体的な政策や事績に触れているのは第 24 章冒頭部と第 26 章のみである。作品全体に占めるスルターン・フサインに関する記述の割合は明らかに少なく，そこで扱われている内容も引用文にあるようなニザーム・アルムルクの指示とは一致しない。それに対して，第 27 章の内容は正に「スルターン・フサインの慈善の徴」に相当するものであり，A 版写本は他のバージョンに比べてニザーム・アルムルクの指示により忠実な構成を有しているとみなしうる。

2 つ目の根拠は，第 27 章に引用されている文章とイスフィザーリーとの関係である。第 27 章では，まず執筆者は当時サドルの地位にあったクトゥブ・アッディーン Quṭb al-Dīn[36] を通じて，スルターン・フサインからイスラーム法に反する税の徴収を禁止する勅令を起草するよう命令を受け，その任務を果たしたことが述べられる。その後，再びクトゥブ・アッディーンを通じて，先の勅令とは逆に今度はイスラーム法に反する税の徴収を命じる勅令を起草するよう指示される。それに対して，第 27 章の執筆者は以下のように答えている。

〔かつて〕この下僕はそれ（イスラーム法に反する諸税）を免除する勅令（nishān-i bakhshish-i ān）を起草し，〔そのことが自身の〕罪に対する大いなる償いになることを心の支えにしています。その勅令の最後には「圧制の慣習というだけでなく，不信仰の慣例に属する，この件の継続に努めたり，同意したりする者あれば，その者に神と天使，人類全ての呪いがありますように」と書かれています。それなのに，どうして〔この下僕が〕そのこと（イスラーム法に反する税の徴収を命じる勅令の起草）に同意したり，取り組んだりすることが出来るでしょうか。［PSC108: 402a］

この引用文中，鍵括弧で囲んだ箇所が，第 27 章の執筆者が自ら起草したという 1 つ目の勅令の末尾にあたる。注目すべきは，この文言がイスフィザーリーによるインシャー作品集 *Tarassul* に収録された「タムガ税免除の勅令」の写しの末尾部分と 1 つの単語を除いて完全に一致していることである[37]［TMI: 84b］。すなわち，第 27 章でその末尾部分が引用されている勅令とは，イスフィザーリーが起草し，自身のインシャー作品集に収録し

36）スルターン・フサイン治世前期にサドルを務めた，Quṭb al-Dīn Muḥammad Khwāfī（1489–90 年没）を指していると考えられる。彼は元々ティムール朝第 7 代君主 Sulṭān Abū Saʿīd（在位 1451～69 年）に仕えていたが，その死後ヘラートのスルターン・フサインの許に来て，サドルに任命された。また，彼はスルターン・フサイン治世前半の最も有力なイラン系官僚 Majd al-Dīn Muḥammad Khwāfī（1494 年没）の親族であった［HSK: 321–322］。Majd al-Dīn はヘラートに移住してきたイスフィザーリーを最初に保護した人物であり，イスフィザーリーが引用文にあるような Quṭb al-Dīn とのやり取りを持った背景には Majd al-Dīn との関係があった可能性がある。

37）両史料間で異なる単語とは，引用文中「この件」と訳した īn shughl である。*Tarassul* に収録された「タムガ税免除の勅令」の写しでは，shughl の代わりに amr が使用されている。

た「タムガ税免除の勅令」のことを指していると考えられるのである。

以上のことから，A 版写本に含まれる第 27 章の執筆者は，本作品の著者イスフィザーリー自身であったといえる。

次に，第 27 章が持つ史料的価値についても簡単に指摘しておきたい。まず特筆すべきは，いずれも簡潔な記述ではあるものの，ティムール朝下で実施されていた，イスラーム法に反する様々な税目が紹介されていることである。他のティムール朝史料ではそのような税の名称が挙げられることはあっても，それが何を指しているのか，またどのようにして徴収されたのかなど，具体的な説明が加えられることはほとんどない。そのためか，従来の研究ではティムール朝期の税制，特にイスラーム法に反する様々な税目について説明される際，その根拠となる一次史料が挙げられることはほとんどなかった[38]。今後，ティムール朝における非合法税の税目を検証する際には，まずは本章の記述を参照すべきであろう[39]。

もう 1 つの史料的価値としては，先の引用箇所と関連して，イスフィザーリーが文書起草官として実務にあたる様子が描かれており，そこからティムール朝における勅令発布までの大まかな流れを再現することができるという点である。すなわち，君主による口頭での「命令（ḥukm）」が「パルワーナ（parwāna）」として一旦文書化され，それが文書起草官の許に届けられる。文書起草官はそのパルワーナに基づいて「勅令（nishān）」を起草する。その後，それは「イスラームのミンバルで読み上げられ」，人々に周知される，というものである［PSC108: 401b］。また，従来パルワーナを文書起草官に届ける役職としてパルワーナチー（parwānachī）の存在が知られているが[40]，第 27 章の記述からはサドルが届ける事例もあったことが分かる。以上の点に関しても，分量としては決して多くはないが，他の史料にはない貴重な情報といえるだろう。

2-2. D 版の第 26 章第 1 節及び第 2 節

次に，D 版写本にのみ含まれる第 26 章第 1 節と第 2 節についてであるが，その内容としては，第 1 節ではスルターン・フサインの 14 名の息子たちが，第 2 節ではスルターン・フサインによる 7 件の建築活動が，それぞれ扱われている。

この箇所についても，前節同様，まずはその執筆者が誰なのかを検討しておきたい。ただし，A 版写本の場合その親写本にあたるものが本作の最終稿とみなしうるのに対して，D 版写本の場合は書写年代のかなり新しい写本 Daneshgah5745 の 1 点だけであり，親写本の成立年代を特定することは不可能である。また，第 26 章第 1 節と第 2 節の内容は前節で紹介した序文のニザーム・アルムルクの指示とある程度整合性を持つものの，それ

38）例えば，Jāmī 書簡集の校訂者や Subtelny は，ティムール朝スルターン・フサイン治世にみられた様々な非合法税を説明する際，典拠として Makhmudov の研究を挙げるのみで，一次史料に関しては一切言及していない［Jami: pīshgoftār 80–89; Subtelny 2007: 75–77］。なお，Makhmudov の一連の研究［N. Makhmudov, “Iz istorii zemel’nykh osnoshenii i nalogovoi politiki timuridov,” *Izvestiia Otdeleniia obshchestvennykh nauk AN Tadzhikskoi SSSR*, 1963, 1(32); idem., “Feodal’naia renta i nalogi pri Timure i timuridakh,” *Trudy Tadzhikskogo gosudarstvennogo universitera, Seriia istoricheskikh nauk, vyp*. 2, *Voprosy istorii SSSR*, Dushanbe, 1966］については筆者未見のため，この研究がどのような一次史料に基づいて論じているのかは不明である。

39）これまでの研究を一部修正できる例として，bunīcha に関する見解を挙げることができる。従来，bunīcha は 18 世紀初頭以降に都市の職人集団や商人集団毎に割り当てられた税の名称として用いられるようになったとされてきた［Fragner 1986: 547］。しかし，本章の記述からは，既にティムール朝末期から都市住民に限らず「聖戦用の補助税（nāmbardār-i jihādī）」のために人々の不動産や動産に対して課された割当の名称として使用されていたことが分かる。

40）パルワーナチーの職務については［Herrmann 1968: 207–209; Herrmann 1995］を参照のこと。

だけでは根拠として十分とはいえない。そこで，この箇所の記述内容を詳しく分析したところ，イスフィザーリーが執筆者であることを示す以下のような要素が2点含まれていることが明らかになった。

1点目は，当該箇所が執筆された時期である。ただし，本文中にどの時点の状況を記したものなのか明記されていないため，以下では内容の分析や他史料との照合を通じておおよその執筆時期を指摘する。執筆された時期を検証する際に上限の目安となるのは，第2節にスルターン・フサインによる建造物の1つとして，インジール橋のたもと（sar-i Pul-i Injīl）に建設されたマドラサが挙げられていることである。この施設の完成年は898/1492–3年頃とされており［Golombek & Wilber 1988: 314–315; O'Kane 1987: 339–343］，当該箇所はそれよりも後に書かれたことになる。一方，下限の目安になるのがShāh Gharīb（1496年没）に関する記述である。彼は902/1496年に14名の王子の中で最も早く死去したが［Woods 1990: 26］，当該箇所の内容や書き方から判断する限り，執筆時には存命中であった[41]。以上のことから，第26章第1節及び第2節は，898/1492–3年頃から902/1496年までに書かれたとみなすことが出来る[42]。前章第5節で確認したように，当該箇所が執筆された時期の上限として設定した898/1492–3年ではイスフィザーリーは本作を執筆中であったこと，下限として設定した902/1496年の時点でも少なくとも存命中であったことから，彼自身がこの箇所を執筆した可能性は十分にあるといえる。

2点目は，引用されている韻文の作者の顔触れである。当該箇所の執筆者は他者の韻文を引用する際にはその作者の名を挙げているのだが，Firdawsī（1025年没）［Daneshgah5745: 474, 475］やNiẓāmī（1209年没）［Daneshgah5745: 474］，Sa'dī（1292年没）［Daneshgah5745: 480］，Amīr Khusraw（1325年没）［Daneshgah5745: 478, 479］，Salmān Sāwajī（1376年没）［Daneshgah5745: 479］といったペルシア文学史上に名を残す偉大な詩人たちと並んで，アブド・アルワースィウ・ジャバリー 'Abd al-Wāsi' al-Jabalī（没年不明）［Daneshgah5745: 476］とマウラーナー・リヤーディー Mawlānā Riyāḍī（1515–6年没）［Daneshgah5745: 475, 476］[43] というあまり名の知られていない詩人の名を挙げて，その作品を引用している。この2名の詩人はいずれも一時期ヘラート及びその近郊に在住していたことがあり，さらに後者についてはイスフィザーリーと同時代人でもあった[44]。以上のような経歴を持つ詩人の詩を，イスフィ

41）当該箇所では，当時彼は同母弟のMuẓaffar Ḥusayn（1507–8年没）と共にスルターン・フサインの「後継者」とされており，その文章は現在形で書かれている［Daneshgah5745: 474］。

42）補足的な根拠として，別の王子Muḥammad Ḥusayn（1503年没）に関する記述を挙げることが出来る［Daneshgah5745: 475］。この王子に関しては当時ティムール朝ヘラート政権の領土を離れてイラク在住であったと記されているが，他の同時代史料でも彼が同母兄のSulṭān Abū Turāb と共にイラクに移住したことが記録されている［BNB: 128; HSK: 216］。さらに，彼は903/1497–8年にホラーサーンへの帰還を果たしていることから［HSK: 217］，当該箇所はそれよりも前に記述されたことになる。

43）ただし，第26章第1節及び第2節においてリヤーディー作とされる詩は合計3篇引用されているが，そのうちの1つは実際にはAmīr Khusrawの作品である［cf. Daneshgah5745: 475］。

44）ジャバリーはセルジューク朝君主Sulṭān Sanjar（在位1118～57年）と同時代の詩人。Gharchistān出身で後にヘラートに移住し，さらにそこからGhaznaに移って宮廷詩人としてガズナ朝君主Bahrāmshāh（在位1118～52年）に4年間仕えた［TSD: 131–133］。一方，リヤーディーはティムール朝末期のホラーサーン地方のZāwa出身で，元々その地のカーディーを務めていた。やがて，イスラーム法に反する罪を犯したため罷免された後，ヘラートで詩人として活動するようになった。シャイバーン朝によるヘラート征服後はShaybānī Khān（在位1500～10年）に仕え，彼の征服譚を韻文作品にするよう命じられたが結局完成しなかったという［MNP1: 77; MNP2: 253; TSS: 164–165］。

ザーリーがヘラートとその周辺地域の歴史地誌を扱う自身の作品の中で引用すること自体はごく自然な流れであったと考えられる。実際イスフィザーリーは本作品の他の箇所でも，先に挙げたような著名な詩人たちと共に，この2人の詩人の名を挙げてそれぞれの詩を複数回引用しているのである[45]。

以上，いくつかの観点から検証を進めてきたが，D版写本として書写年代がかなり新しい本写本の1点しか発見できていない理由を説明することは出来ず，執筆者の特定に関しては未だ議論の余地があるのは確かである[46]。しかし，第26章第1節及び第2節の執筆者がイスフィザーリーであることを示す根拠はそれなりに揃っているといえるだろう。

最後に，第26章第1節及び第2節の内容についても簡単に触れておこう。まず，第1節では，スルターン・フサインの14名の息子たちが列挙され，彼らを称える韻文と共にそれぞれに関して簡単な説明がなされている。14名の王子を列挙するという形式に関しては，同時代史料の『バーブル・ナーマ（*Bābur-nāma*）』及び『道徳の伴侶』の記述と共通している［BNB: 127–131; HSK: 320–321］。しかし，この両書では構成上それぞれの王子の母親が誰であるかを示すことに重きが置かれているのに対して，当該箇所では各自の母には言及されず，代わりに14名のうち8名の王子についてそれぞれが総督に任じられた地域が挙げられている。このように，他の同時代史料と比べた場合，扱われている情報に違いが見られるだけでなく，王子たちが統治を委ねられた地域についても一部異なる説明がある[47]。以上のことから，単に上述の2作品を引用した訳ではなく，別の情報源に基づいて記述されたと思われる。

次に，第2節ではスルターン・フサインが行った合計7件の建築活動が列挙され，それぞれに説明が加えられている。これら7件については，ホンダミールの『諸情報の精髄（*Khulāṣat al-Akhbār*）』と『諸王の事績（*Ma'āthir al-Mulūk*）』の中で，スルターン・フサインによる建築物として列挙されているものと一致する[48]［KAK: 195–201; MMK: 174–175］。しかし，そのうち，Ni'matābād[49]，SNJAB[50]の建築群，

45）『天国の諸庭園』の他の箇所において，ジャバリーの名とその詩は［RJI-tx1, v. 1: 20, 63, 146, 147; ibid. v. 2: 6, 168］で，リヤーディーの名とその詩は［RJI-tx1, v. 2: 132, 135, 136］で，それぞれ記述・引用されている。

46）例えば，1つ目の王子に関する記述の時期については，『天国の諸庭園』執筆時のティムール朝王子たちの状況を把握していた後世の人物がイスフィザーリーになりすまして執筆した可能性もある。また，2つ目の2名の詩人については，そもそも引用されている詩が本当に彼らによって作られたものなのか確認する術がない。そのため，後世の人物が当該箇所を創作し，本作品の他の箇所で複数回登場する彼ら2名の名前を適当に使用しただけ，ということもありうる。ただ，仮にそうだとしても，そもそも当時のことを詳細に調べてまでイスフィザーリーになりすまして執筆する理由がよく分からない。

47）本写本ではIbrāhīm Ḥusayn（1504年没）がカンダハールとザミーンダーワルの統治者であったとされているが，『道徳の伴侶』では彼が1490年と1497年に一時的にバルフの総督を務めていたことのみ確認できる［HSK: 189, 211］。一方，『バーブル・ナーマ』によれば，カンダハールの総督を務めたのは，彼の同母兄弟Muḥammad Ma'ṣūm（1501年没）であった［BNB: 130］。

48）ここで挙げられている建築活動7件は以下の通り。①世界を飾る者の庭園（Bāgh-i Jahān-ārāy）と宮殿，② Ni'matābād，③大バーザールChahār-sūのハーンカー，④スルターン・フサインの母Fīrūza Begimの墓廟，⑤SNJABの建築群，⑥インジール橋のたもとのマドラサ，⑦Ziyāratgāhの金曜モスク。なお，スルターン・フサイン治世にヘラートで行われた建築活動の全体的な特徴については［Allen 1983: 24–35］にまとめられている。

49）ヘラートの郊外，市街の北東に位置したと考えられる建造物の名称であるが，詳細は不明［Allen 1981: 160］。バーブルは912/1506年にヘラート滞在中に訪れた市内及び郊外の名所の1つとして，この施設の名を挙げている［BNB: 193–195］。バーブルの記述の順番から判断する限り，ヘラートの市壁から北東約5 kmに位置し，この街の守護聖人 'Abd Allāh Anṣārī（1089年没）の墓　↗

Ziyāratgāh の金曜モスク[51] の 3 件に関しては，ホンダミールは単にその名を挙げているだけで，具体的な説明を一切残していない。それに対して，当該箇所では上記の 3 件の建造物に関して比較的詳しい記述が残されており，他の史料では見られない独自の情報とみなしうるだろう。

以上のように，この第 26 章第 1 節及び第 2 節の記述はいずれも短いものではあるが，そもそも同時代史料の中にティムール朝末期の王子たちのまとまった記述や，スルターン・フサインによる建築物に関する記録そのものがほとんど残されていないため，非常に貴重な情報といえるのである。

おわりに

イラン史研究において，『天国の諸庭園』という史料そのものは古くからよく知られた存在であったが，テヘラン版が出版されて以来，本作品の写本が分析対象とされることはほとんどなかった。こうした状況に対して，筆者は本作品の現存する写本のうち，全体の構成が把握でき，比較的書写年代の古い写本を対象として，調査を行った。その結果，それぞれの写本は章や節の総数の違いに基づいていくつかの写本群に分類可能であることが判明した。

本稿では各写本群の構成や特徴について述べてきたが，中でも A 版写本群には本作品の写本のうち最も書写年代が古いものが含まれているだけでなく，この A 版写本は『天国の諸庭園』の最も完成された構成を有していることが明らかになった。また，A 版写本と D 版写本に含まれる未校訂箇所については，いずれも執筆者はイスフィザーリー自身である可能性が高いこと，どちらも分量そのものはそれほど多くないものの，それぞれ他の史料では確認できない独自の情報を有していることを指摘した。具体的には，A 版写本にのみ存在する第 27 章には，ティムール朝末期に徴収されていたイスラーム法に反する税目に関する情報が含まれる。また，D 版写本にのみ存在する第 26 章第 1 節では，スルターン・フサインの王子 14 名が列挙され，そのうち 8 名については総督として統治を委ねられた地方名が挙げられている。一方，同章第 2 節にはスルターン・フサインによる建築活動に関して独自の記述が残されている。なお，上記の未校訂箇所については，付録にてアラビア文字ペルシア語テキストを掲載した。それぞれの記述内容の詳細については，そちらを参照されたい。

残念ながら，本稿ではそれぞれの写本バージョン間の参照関係については明らかにすることが出来なかった。この点に関しては，『天国の諸庭園』の現存する写本のうち，今回扱えなかった，後世に書写された写本を対象として，新たな調査を行う必要がある。また，本稿は写本群の解説と未校訂箇所の内容紹介

↗　廟があることで知られる，Gāzurgāh の近くにあったと思われる。

50）この地名については詳細不明。『諸王の事績』では，スルターン・フサインによる建造物の 1 つとして Ribāṭ-i kūtal-i SNJAB という建造物の名前のみ挙げられている［MMK: 175］。同書で建造物を列挙する際の書き方から判断すると，ヘラート以外の地域にあった可能性が高い。また，第 26 章第 2 節の記述によれば，ヘラートの北に位置する Bādghīs に含まれる地名のようだが，他の史料や先行研究にそれらしい情報は見当たらなかった。一方，Ḥāfiẓ-i Abrū（1430 年没）は，Bāmiyān 付近に Sanjāb と呼ばれる隘路があることを伝えている［THA: 62; Krawulsky 1984: 48］。第 26 章第 2 節では SNJAB 地方を通過する際に寒さのあまり命を落とす人がいると述べられており，ヒンドゥークシュ近くの隘路であればありうる話かと思われたが，ヘラートや Bādghīs からあまりにも離れているため確定には至らなかった。

51）Ziyāratgāh はヘラートの郊外，市壁から南約 16 km に位置する村［Allen 1981: 85］。スルターン・フサインによってこの地に建造された金曜モスクについては，［Allen 1981: 116; O'Kane 1987: 259–263］も参照のこと。

を目的として論を進めてきた。今回紹介したテキストに含まれる情報に基づく，ティムール朝末期の税制及びスルターン・フサイン治世の統治体制に関する本格的な検証については，今後の課題としたい。

参考文献

◉一次史料◉

BNB: Bābur, *Bābur-nāma*. In: バーブル（間野英二訳注）2014『バーブル・ナーマ 2：ムガル帝国創設者の回想録』（東洋文庫），平凡社.

HSK: Khwāndamīr. 133kh. *Ḥabīb al-Siyar fī Akhbār Afrād Bashar*. vol. 4. Eds. Jalāl-Dīn Homā'ī and Moḥammad Dabīr Siyāqī. Tehran: Enteshārāt-e Ketābforūshī-ye Khayyām.

Jami: Nūr al-Dīn ʻAbd al-Raḥmān b. Aḥmad Jāmī. 1378kh. *Nāma-hā wa Munsha'āt-i Jāmī*. Eds. ʻEṣām al-Dīn Ūrūnbāyef and Asrār Raḥmānūf. Tehran: Mīrāth-e Maktūb.

KAK: Khwāndamīr, *Khulāṣat al-Akhbār*. In: Khwāndamīr. 1372kh. *Ma'āthir al-Mulūk, be-ḍamīma-ye khāteme-ye Khulāṣat al-Akhbār va Qānūn-i Humāyūnī*. Ed. Mīr Hāshem Moḥaddeth. 181–245, Tehran: Mo'assese-ye khadamāt-e Farhangī-ye Rasā.

MJB: ʻAbd al-Wāsiʻ Niẓāmī Bākharzī. 1383kh. *Maqāmāt-i Jāmī*. Ed. Najīb Māyel Heravī. Tehran: Nashr-e Ney.

MMK: Khāndamīr, *Ma'āthir al-Mulūk*. In: Khwāndamīr. 1372kh. *Ma'āthir al-Mulūk*. Ed. M.H. Moḥaddeth. 17–179.

MNP1: Sulṭān Muḥammad Fakhrī Harātī, *Laṭā'if-nāma (Tarjuma-yi Majālis al-Nafā'is)*. In: [Mīr Niẓām al-Dīn Alīshīr Nawā'ī]. 1363kh. *Tadhkira-yi Majālis al-Nafā'is*. Ed. ʻAlī Aṣghar Ḥekmat. 1–178, Tehran: Ketābforūshī-ye Manūchehrī.

MNP2: Ḥakīm Shāh Muḥammad Qazwīnī, *Tarjuma-yi Majālis al-Nafā'is*. In: [Mīr Niẓām al-Dīn Alīshīr Nawā'ī]. 1363kh. *Tadhkira-yi Majālis al-Nafā'is*. 179–409.

MSS: ʻAbd al-Razzāq Samarqandī. 1383kh. *Maṭlaʻ-i Saʻdayn wa Majmaʻ-i Baḥrayn*. jeld-e 2, daftar-e 2. Ed. ʻAbd al-Ḥoseyn Navā'ī. Tehran: Pazhūheshgāh-e ʻOlūm-e Ensānī va Moṭāleʻāt-e Farhangī.

RJI: Muʻīn al-Dīn Muḥammad al-Zamchī al-Isfizārī, *Rawḍāt al-Jannāt fī Awṣāf Madīnat Harāt*.
Add16704: Ms. The British Library, Add.16704.
Add22380: Ms. The British Library, Add.22380.
Daneshgah5453: Ms. Ketābkhāne-ye Markazī-ye Dāneshgāh-e Tehrān, 5453.
Daneshgah5745: Ms. Ketābkhāne-ye Markazī-ye Dāneshgāh-e Tehrān, 5745.
Majles2298: Ms. Ketābkhāne-ye Majles-e Shūrā-ye Eslāmī, 2298.
Malek3888: Ms. Ketābkhāne-ye Mellī-ye Malek, 3888.
IO195: Ms. The British Library (from the Library of the India Office), I.O.195 (Ethé570).
Or4106: Ms. The British Library, Or.4106.
PSC108: Ms. The Asiatic Society, PSC.108.
tx1: 2 vols. Ed. Seyyed Moḥammad Kāẓem Emām. Tehran: Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1338–1339kh.
tx2: Ed. Moḥammad Ishaque. Aligarh: Aligarh Muslim University, 1961.

THA: *Tārīkh-i Ḥāfiẓ-i Abrū, bakhsh-i Jughrāfiyā-yi Khurāsān*. In: Krawulsky, Dorothea. 1982. *Ḥorāsān zur Timuridenzeit nach dem Tārīḫ-e Ḥāfeẓ-e Abrū (verf. 817–823 h.) des Nūrallāh ʻAbdallāh b. Lutfallāh al-Ḥvāfī genannt Ḥāfeẓ-e Abrū: I. Edition und Einleitung*. Wiesbaden: Ludwig Reichert Verlag.

TMI: Muʻīn al-Dīn Muḥammad al-Zamchī al-Isfizārī, *Tarassul*. Ms. Ketābkhāne-ye Majles-e Shūrā-ye Eslāmī (Ketābkhāne-ye Majles-e Senā-ye Sābeq), 318ss.

TSD: Dawlatshāh Samarqandī. 1385kh. *Tadhkirat al-Shuʻarā'*. Ed. Fāṭeme ʻAllāqe. Tehran: Pazhūheshgāh-e ʻOlūm-e Ensānī va Moṭāleʻāt-e Farhangī.

TSS: Sām Mīrzā Ṣafawī. 1389kh. *Tuḥfa-yi Sāmī*. Ed. Fāṭeme Angūrānī. Tehran: Enteshārāt-e Anjoman-e Āthār va Mafākher-e Farhangī.

◉写本目録◉

Blochet, Edgar. 1905. *Catalogue des manuscrits Persans*. vol. 1. Paris: Bibliothèque nationale.

Bregel', Yuri Enohovich (*Брегель, Юрий Эноxович*). 1972: Персидская Литература: Биобиблиографический обзор, часть 2. Москва: Глав. ред. восточной лит-ры.

Dāneshpazhūh, Moḥammad Taqī. 1357kh. *Fehrest-e noskhehā-ye khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Markazī va Markaz-e Asnād-e Dāneshgāh-e Tehrān*. vol. 16. Tehran: Enteshārāt-e Dāneshgāh-e Tehrān.

Derāyatī, Moṣṭafā. 1391kh. *Fehrestgān-e noskhehā-ye khaṭṭī-e Īrān (Fankhā)*. vol. 16. Tehran: Sāzmān-e Asnād va Ketābkhāne-ye Mellī-ye Jomhūrī-ye Eslāmī-ye Īrān.

Ethé, Hermann. 1903. *Catalogue of Persian*

Manuscripts in the Library of the India Office. vol. 1. Oxford: Printed for the India Office by H. Hart.

Ivanow, Wladimir. 1924. *Concise descriptive catalogue of the Persian manuscripts in the collection of the Asiatic Society of Bengal*. Calcutta: Asiatic Society of Bengal.

Nafīsī, Saʿīd. 1344kh. *Fehrest-e noskhehā-ye khaṭṭī-ye Ketābkhāne-ye Majles-e Shūrā-ye Mellī*. vol. 6. Tehran: Majles-e Shūrā-ye Mellī.

Rieu, Charles. 1879. *Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*. vol. 1. London: British Museum.

———. 1895. *Supplement to the Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*. London: British Museum.

Storey, Charles Ambrose. 1970. *Persian Literature: A Bio-bibliographical Survey*. vol. 1. London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland: Luzac, reprint of 1927–1958.

◉研究文献◉

Allen, Terry. 1981. *A Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timurid Herat*. Cambridge, Mass.: Aga Khan Program for Islamic Architecture at Harvard University and the Massachusetts Institute of Technology.

———. 1983. *Timurids Herat*. Wiesbaden: Ludwig Reichert Verlag.

Barbier de Meynard, Charles Adrien Casimir. 1860. "Extraits de chronique persane d'Herat 1." *Journal asiatique*, 5e Série, v. 14: 461–520.

———. 1861. "Extraits de chronique persane d'Herat 2." *Journal asiatique*, 5e Série, v. 17: 438–522.

———. 1862. "Extraits de chronique persane d'Herat 3." *Journal asiatique*, 5e Série, v. 20: 268–319.

Begley, Wayne E. 1989. "AMĀNAT KHAN." *EIr.* vol.1. 923–924, New York: Bibliotheca Persica Press.

Browne, Edward Granville. 1928. *A Literary History of Persia.* vol.3. Cambridge: Cambridge University Press.

Fragner, Bert G. 1986. "Social and Internal Economic Affairs." *The Cambridge History of Iran*, *vol. 6: Timurids and Safavid periods* (Peter Jackson and Laurence Lockhart, eds.), 491–567, Cambridge: Cambridge University Press.

Golombek, Lisa and Wilber, Donald. 1988. *The Timurid Architecture of Iran and Turan*. vol. 1. Princeton, N.J.: Princeton University Press.

Herrmann, Gottfried. 1968. *Der historische Gehalt des "Nāmā-ye nāmī" von Ḫāndamīr*. Ph.D. Diss., Göttingen.

———. 1995. "PARWĀNAČĪ." *EI2*. vol. 8. 276–277, Leiden: Brill.

Huart, Clément (rev. Henri Massé). 1991. "DJĀMĪ." *EI2*. vol. 2. 421–422, Leiden: Brill.

Krawulsky, Dorothea. 1984. *Ḫorāsān zur Timuridenzeit nach dem Tārīḫ-e Ḥāfeẓ-e Abrū (verf. 817–823 h.) des Nūrallāh ʿAbdallāh b. Luṭfallāh al-Ḥvāfī genannt Ḥāfeẓ-e Abrū: II. Übersetzung und Ortsnamenkommentar*. Wiesbaden: Ludwig Reichert Verlag.

Losensky, Paul. 2008. "JĀMĪ i. Life and Works." *EIr*. vol. 14. 469–475, New York: Bibliotheca Persica Press.

Manz, Beatrice Forbes. 2007. *Power, Politics and Religion in Timurid Iran*. Cambridge: Cambridge University Press.

Noelle-Karimi, Christine. 2014. *The Pearl in its Midst: Herat and the Mapping of Khurasan (15th–19th Centuries)*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

O'Kane, Bernard. 1987. *Timurid Architecture in Khurasan*. Costa Mesa: Mazdâ Publishers.

Subtelny, Maria Eva. 1998. "ESFEZĀRĪ." *EIr*. vol. 8. 595–596, New York: Bibliotheca Persica Press.

———. 2007. *Timurids in Transition: Turko-Persian Politics and Acculturation in Medieval Iran*. Leiden, Boston: Brill.

Woods, John E. 1990. *The Timurid Dynasty*. Bloomington, Ind.: Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies.

久保一之　1990「ミール・アリー・シールの学芸保護について」『西南アジア研究』32: 21–55.

———　1997「ティムール朝とその後―ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き―」『岩波講座世界史 11―中央ユーラシアの統合 9–16 世紀―』，147–176，岩波書店.

———　2012「ミール・アリーシールと"ウイグルのバフシ"」『西南アジア研究』77: 39–73.

———　2014「ミール・アリーシールの家系について―ティムール朝における近臣・乳兄弟・譜代の隷臣・アミール―」『京都大学文学部研究紀要』53: 141–233.

杉山雅樹　2012「*Tarassul-i Muʿīn al-Dīn Muḥammad Isfizārī* に関する一考察」『西南アジア研究』76: 42–71.

［表 1］写本群の分類基準

		A 版	B 版	B-1	C 版	D 版
①	第 27 章（結語含む）及び序文での「ミール・アリー・シールの権勢に関する祈願」の有無	○	×	×	×	×
②	第 24 章冒頭部の有無	○	○	×（空白）	×	×
③	第 18 章第 1 節，第 23 章第 1 節及び第 2 節，第 24 章第 1 節に相当する記述の有無	○	○	○	×	○
④	第 26 章第 1 節と第 2 節の有無	×	×	×	×	○

［表 2］各写本群の情報

A 版写本群

略号	所蔵図書館（都市），番号	書写年	葉(行)	備考
①PSC108	The Library of the Asiatic Society (Kolkata), PSC108	911.Dhū al-Ḥijja.10-20/ 1506.3.14-24	406 (17)	本文が始まる前に，異なる筆跡で書かれた目次あり。全体が完全な形で残存。ただし，湿度や虫食いの影響で破損が激しい。
②Add16704	The British Library (London), Add.16704	1002.Dhū al-Qa‘da.11/ 1594.7.29	349 (17)	本文が始まる前に，異なる筆跡で書かれた目次あり。全体が完全な形で残存。ムガル朝宮廷図書館に所蔵されていた写本。

B 版写本群

③IO195	The British Library (London), I.O.195 (Ethé570)	920.Rabī‘ al-Awwal/ 1514.5.6-6.4	261 (23)	複数の人物により書写。全体が完全な形で残存。
④Majles2298	Ketābkhāne-ye Majles-e Shūrā-ye Eslāmī (Tehran), 2298	999.Dhū al-Ḥijja.9/ 1591.9.28	382 (19)	‘Abd al-Ḥayy b. Ḥabīb Allāh により書写。全体が完全な形で残存。

B-1

⑤Or4106	The British Library (London), Or.4106	933.Rabī‘ al-Awwal/ 1526.12.16-1527.1.15	399 (17)	Zayn al-Dīn ‘Alī b. Aḥmad b. Quṭb al-Dīn により書写。第 24 章冒頭部の大部分は空白（380b の 3 行目以降～381a）。

C 版写本群

⑥Malek3888	Ketābkhāne-ye Mellī-ye Malek (Tehran), 3888	981/1573.3.13-1574.3.2	214 (19)	錯簡や欠落が激しい。各葉を正しく並べ直すと以下の通り（1-3//33-204//5-18//211//205-210//19-32//4//212-213）。
⑦Daneshgah5453	Ketābkhāne-ye Markazī-ye Dāneshgāh-e Tehrān (Tehran), 5453	987.Jumādā al-Thāniyya.10-20/ 1579.8.14-24	255 (17)	Khwāja Kalān Arzana により書写。写本の冒頭部分欠落。著者序文の途中（tx1: v. 1, 42）から始まる。
⑧Add22380	The British Library (London), Add.22380	1002.Sha‘bān/ 1594.4.22-5.20	273 (19)	全体が完全な形で残存。

D 版写本群

⑨Daneshgah5745	Ketābkhāne-ye Markazī-ye Dāneshgāh-e Tehrān (Tehran), 5745	（1187.Muḥarram/ 1773.3.25-4.23 読誦記録）	236 (17)	複数の葉が欠落。後世に別の写本から書写したものが挿入されている（1b-15b, 17a-b, 20a-b, 23a-b, 25a-28b, 31a-b, 223a-b）。

［表 3］『天国の諸庭園』写本バージョン別の構成

章	序文の各タイトル／各章や各節のタイトル［校訂本（tx1）の頁数］	A 版	B 版	C 版	D 版
		PSC108	IO195	Add22380	Daneshgah 5745
序文	緒言［v. 1: 1–6］	1b–4a	1b–3a	2b–4b	[1b–3a]
	スルターン・フサインに関する祈願とラカブ［7–12］	4a–7a	3a–5a	4b–6a	[3a–5b]
	望みを叶える〔ティムール朝〕王子たちの権勢と長命に関する祈願［13–15］	7a–(8a)	5a–5b	6a–7a	[5b–6a]
	アミールたちの権勢に関する祈願［16–18］	(8a)–9b[52]	5b–6a	7a–b	[6a–b]
	Mīr ʻAlī Shīr の権勢に関する祈願［----］	9a–10b	----	---	----
	ヘラートの特性［19–24］	10b–12b	6a–8a	7b–9b	[6b–8b]
	Jāmī への称賛［25–29］	(13a)[53] –15a	8a–9a	9b–11b	[8b–10a]
	ヘラートの金曜モスクの特性［30–35］	15a–16b	9a–10b	11b–13a	[10a–11a]
	Qalʻa-yi Ikhtiyār al-Dīn の特性［36–39］	16b–17b	10b–11a	13a–14a	[11a–12a]
	本書執筆の理由と Niẓām al-Mulk に関する祈願とラカブ［40–53］	17b–23a	11a–14b	14a–17b	[12a–15b]
1	ヘラートの建設［54–76］	24b–34a	(14b)[54] –21a	17b–26b	16b–[17a–b]–[20a–b]–22b
2	ヘラートの諸状況				
	1）市街地［77–79］	34a–35a	21a–b	26b–27b	22b–[23a]
	2）付属地［80–86］	35a–37b	21b–23b	27b–30a	[23a]–24b
3	ホラーサーン地方の美徳				
	1）ホラーサーン地方全般の美徳［87–93］	37b–40b	23b–25b	30a–32a	[25a–26a]
	2）ヘラートの美徳［94–100］	40b–44b	25b–28a	32a–34a	[26a–28a]
4	ヘラートに属する主邑や地方，付属地				
	1）Harāt-rūd, Shāqlān, その他［101–106］	44b–47a	28a–29b	34a–35b	[28a–b]–29b
	2）Isfizār［107–118］	47a–52a	29b–33a	35b–39b	29b–[31a–b]–33a
	3）Fūshanj, Shakībān, Kūsūya, Qulbandān［119–132］	52a–58a	33a–36b	39b–44a	33a–36b
	4）Bādghīs, Langar-i Mīr Ghiyāth, Qalʻa-yi NRTW, Karkh 地方［133–152］	58a–66b	36b–42a	44a–50a	37a–42a
5	ホラーサーン地方を構成する諸地域				
	1）Balkh, Andkhūd, Shabrghān, Marw-i Shāhijān, Abīward, Nisā［153–181］	66b–79b	42a–50b	50a–56a	42a–49a
	2）Mashhad, Jām, Khwāf, Bākharz［182–279］	79b–112a	50b–70b	56a–70a	49a–67b
	3）Tarshīz, Juwayn, Baḥrābād, Isfarāyin, Jurjān, Ṭabaristān［280–306］	112a–120b	70b–76a	70a–73b	67b–72b
	4）Quhistān, Sijistān, Farāh, Qandahār, Garmsīr, Ghūr, Gharjistān［307–377］	120b–150b	76a–94b	73b–93a	72b–90a
6	歴代のヘラートの支配者たち				
	1）イスラームの征服〜アッバース朝［378–383］	150b–153a	94b–96a	93a–96a	90a–91b
	2）サーマーン朝［384–392］	153a–157b	96a–99a	96a–100b	91b–94a

52）PSC108: 序文を区分けするための「アミールたちの権勢に関する祈願」というタイトルがない。そのため，テヘラン版や他の写本バージョンで「アミールたちの権勢に関する祈願」の本文に相当する部分が，本写本では「望みを叶える〔ティムール朝〕王子たちの権勢と長命に関する祈願」の本文に含まれてしまっている。なお，これについてはもう 1 つの A 版写本 Add16704 でも同様である。

53）PSC108: 12b の最終行で「ヘラートの特性」の本文が終わった後，残りの行の半分ほどが空白のままになっている。次の 13a の 1 行目からは，「ジャーミーへの賞賛」のタイトルは書かれないまま，その本文にあたる記述が始まっている。なお，同じ A 版写本群に属す Add16704 では，タイトルが明記されている。

54）IO195: 第 1 章のタイトルが書かれていない。ただし，序文の記述が 14b の 5 行目で終わり，14b の残りの部分と 15a 全体が空白になっているため，序文と第 1 章の始まりを区別することは可能である。

7	グール朝とカルト朝				
	1）グール朝［393–400］	157b–161b	99a–101a	100b–102a	94a–96a
	2）カルト朝［401–441］	161b–182b	101a–110b	102a–110b	96a–106a
	3）Amīr Dānishmand Bahādur の出来事［442–453］	182b–187b	110b–113b	110b–113a	106a–108b
	4）Malik Ghiyāth al-Dīn とその他のカルト朝マリク［454–488］	187b–206b	113b–125a	113a–119b	108b–118b
	5）Malik Ghiyāth al-Dīn と Malik Quṭb al-Dīn Isfizārī, Malik Yanāltagīn との間の事件［489–504］	206b–212a	125a–128b	119b–123a	118b–121b
	6）Malik Ghyāth al-Dīn の建築活動とメッカ巡礼［505–517］	212a–217a	128b–131b	123a–126b	121b–124a
	7）Malik Shams al-Dīn Muḥammad の統治［518–522］	217a–219a	131b–132b	126b–127b	124a–125b
8	Malik Ghiyāth al-Dīn の死と彼の子供たちの状況［v. 2: 1–7］	219a–222a	132b–134b	127b–130b	125b–127a
	1）Amīr Wajīh al-Dīn Mas‘ūd Sarbadār と Shaykh Ḥasan Jūrī による Malik Mu‘izz al-Dīn Ḥusayn との戦い［8–12］	222a–224b	135a–136b	130b–132b	127a–128b
	2）Amīr Ghazaghan によるヘラート包囲，及び彼と Malik Mu‘izz al-Dīn との戦い［13–16］	224b–227a	136b–138a	132b–134b	128b–129b
	3）Malik Mu‘izz al-Dīn による Amīr Ghazaghan への伺候［17–23］	227a–229b	138a–139b	134b[55] –136b	129b–131a
	4）Tīmūr による Malik Mu‘izz al-Dīn の許への皇子 Jahāngīr 派遣，及び Malik の死［24–27］	229b–231a	139b–140b	136b–138b	131a–132a
	5）Malik Ghiyāth al-Dīn Pīr ‘Alī の即位［28–31］	231a–233a	140b–142a	138b–140a	132a–133b
	6）Tīmūr と Malik Ghiyāth al-Dīn との間に生じた状況［32–34］	233a–234b	142a–143a	140a–141b	133b–134a
	7）Sewinch Qutluq Āghā と Malikzāda の結婚［35］	234b–235b	143a–b	141b–142b	134a–b
9	Tīmūr によるホラーサーン遠征［36–45］	235b–242a	143b–148a	142b–148a	134b–138b
10	Tīmūr，ホラーサーンの統治を Shāh Rukh に委ねる［46–48］	242a–244a	148a–149a	148a–150a	138b–139b
11	かつて，または最近ヘラートで生じた出来事について				
	1）Shaykh ‘Abd al-Raḥmān Fāmī の歴史書からの引用［49–55］	244a–249a	149a[56] –152b	150a–154a	139b–142a
	2）Chīngīz Khān とその子孫の時代に生じた出来事［56–59］	249a–251b	152b–154a	154a–156b	142a–143b
	3）ヘラートの 2 度目の荒廃［60–63］	252a–255a	154a–156a	156b–158b	143b–145a
	4）Khaṭīb Chaghratān とヘラートのアイヤールによる出来事［64–69］	255a–259a	156a–138a	159a–161a	145a–147a
	5）Qutluqiyān と集会モスクでの彼らの殺害［70–71］	259a–260a	138a–159a	161a–162a	147a–b
12	Būjāy b. Dānishmand の出来事と彼がもたらした荒廃［72–83］	260a–271b	159a–165b	162a–168b	147b–153a
13	Shāh Rukh 治世の出来事［84–86］	271b–(273a)	165b–166b	168b–170a	153a–154a
	1）Bāysunqur Mīrzā の死［87–91］	(273a)–275a	166b–168a	170a–172a	154a–155a
	2）ペストによる災害［92–94］	275a–277a	168a–169a	172a–174a	155a–156a
	3）Shāh Rukh の死［95–100］	277a–281a	169a–171b	174a–176b	156a–158b
14	Tūlī Khān 軍によって荒廃した後の，ヘラートとホラーサーンの復興［101–109］	281a–288a	171b–176a	176b–181b	158b–162a
	1）Amīr ‘Izz al-Dīn Muqaddam の統治［110–114］	288a–289b	176a–177b	181b–183a	162a–163b
	2）Qarlugh, Sūkū, Amīr Muḥammad b. ‘Izz al-Dīn の統治［115–117］	289b–291a	177b–178b	183a–184a	163b–164a
	3）Malik Majd al-Dīn Kālīwīnī の統治［118–122］	291a–294b	178b–180b	184a–187a	164b–166a
	Shāh Rukh 死後の出来事［123–127］	294b–297a	180b–182b	187a–190a	166a–168a
	1）Ulugh Beg によるホラーサーン遠征［128–133］	297a–303a	182b–185b	190a–194b	168a–170a

55）Add22380: 誤って chaman-i 1 となっている。
56）IO195: chaman-i 1 の節番号とタイトルなし。

15	2）‘Alā’ al-Dawla Mīrzā の息子 Ibrāhīm Sulṭān の割礼の儀式[57]［134–136］	303a–304b	185b–186b	194b–196a	170a–171a
	3）Ulugh Beg と ‘Alā’ al-Dawla の争い［137–147］	304b–311b	186b–191b	196a–203a	171a–175a
16	Abū al-Qāsim Bābur の即位［148–154］	311b–315b	191b–194b	203a–206b	175a–177b
	1）Sulṭān Muḥammad Mīrzā，ファールスからホラーサーンへ［155–158］	315b–317b	194b–196a	206b–209a	177b–179a
	2) Abū al-Qāsim Bābur と Sulṭān Muḥammad のアミールたちとの戦い［159–162］	317b–320a	196a–197b	209a–201b	179a–180a
17	Abū al-Qāsim Bābur，2 度目の即位［163–164］	320a–322a	197b–199a	201b–213a	180a–181b
	1）Sulṭān Abū Sa‘īd の統治の始まり［167–170］	322a–324a	199a–200b	213a–215a	181b–182b
	2）Chinārān で　の Abū al-Qāsim Bābur と Sulṭān Muḥammad との戦い［171–179］	324a–330a	200b–204b	215a–221b	183a–186a
	3）Abū al-Qāsim Bābur，スィジスターンに Amīr Khalīl 派遣［180–184］	330a–332a	204b–206b	((220b–221b))[58]	186a–187b
	4）Abū al-Qāsim Bābur，マシュハドへ［185–196］	332a–336b	206b–209b	221b–225a	187b–190b
	5）Ibrāhīm Mīrzā の即位［197–200］	336b–338a	209b–211a	225a–226b	190b–191a
18	Sulṭān Abū Sa‘īd によるホラーサーン遠征と支配権の獲得［201–209］	338a–342a	211a–213b	226b–230a	191b–193b
	1）‘Alā’ al-Dawla の帰還［210–212］	342a–343a	213b–214b	----	193b–194a
19	トゥルクマーンの帝王の即位［213–222］	343a–347a	214b–217b	230a–233a	194a–196b
20	Sulṭān Abū Sa‘īd による 2 度目のホラーサーンの王位就任［223–229］	347a–349a	217b–219a	233a–235a	196b–198a
	1) Sulṭān Ḥusayn Mīrzā の状況の始まりについて［230–238］	349a–352b	219a–222a	235a–237b	198a–200b
	2）Sulṭān Abū Sa‘īd によるマーザンダラーン遠征［239–247］	352b–356a	222a–224b	((237a–b))[59]	200b–202b
	3）Khwāja Nāṣir al-Dīn ‘Ubayd Allāh のホラーサーン来訪，及びヘラートでのペストによる被害について［248–271］	356a–366a	225a–233a	237b–244a	202b–209b
	4）Sulṭān Abū Sa‘īd の子 Bāysunghur Sulṭān の誕生［272–279］	366a–369a	233a–235a	244a–246a	209b–211b
21	Sulṭān Abū Sa‘īd によるイラク遠征［280–289］	369a–373a	235a–238b	246b–250b	211b–214b
22	Sulṭān Abū Sa‘īd の捕囚と死［290–298］	373b–376a	239a–241a	250b–254a	214b–216b
	1）Sulṭān Abū Sa‘īd 拘束後に生じた出来事［299–307］	376a–378b	241a–243a	254a–256b	216b–218a
23	Sulṭān Ḥusayn の即位［308–316］	378b–381b	243a–245b	256b–259b	218a–220a
	1）Bāgh-i Jahān-ārāy と Qaṣr-i Dil-gushā’［317–319］	381b–382b	245b–246b	----	220a–221a
	2）この頃に生じた出来事［320–322］	382b–384a	246b–248a	----	221a–222a
	3）Sulṭān Abū Sa‘īd の息子たち［323–327］	384a–385a	248a–249a	259b[60] –260b	222a–b
24	Sulṭān Ḥusayn の即位直後に起きた出来事［328–330］	385a–386b	249a–250a	----	----
	1）Sulṭān Ḥusayn の母 Fīrūza Begim の死［331–333］	386b–388a	250a–251a	----	222b–224b
	2）Sulṭān Ḥusayn が Yādgār Muḥammad Mīrzā との戦いに向かう［334–349］	388a–392a	251a–254b	260b[61] –265a	224b–227a

57）PSC108:「Ibrāhīm Mīrzā と ‘Alā’ al-Dawla Mīrzā の状況について」。本文の内容はテヘラン版や他の写本バージョンと同じ。

58）Add22380: 本写本のこの箇所は，テヘラン版や他の写本バージョンにおける節とは区分の仕方が異なる。本写本での第 17 章第 2 節は，テヘラン版や他の写本バージョンにおける第 17 章第 2 節に，同章第 3 節の一部（tx1, v. 2: 183–184 に相当）を加えたものに相当する。なお，本写本の第 17 章第 3 節は，テヘラン版や他の写本バージョンにおける第 17 章第 4 節にあたり，以降節の数は 1 つずつズレが生じている。

59）Add22380: 本写本のこの箇所は，テヘラン版や他の写本バージョンにおける節とは区分の仕方が異なる。本写本での第 20 章第 1 節は，テヘラン版や他の写本バージョンにおける第 20 章第 1 節の一部（tx1, v. 2: 230–235, 236）と同章第 2 節の一部（tx1, v. 2: 240, 241–242）に相当する。なお，本写本の第 20 章第 2 節は，テヘラン版や他の写本バージョンにおける同章第 3 節にあたり，以降節の数は 1 つずつズレが生じている。

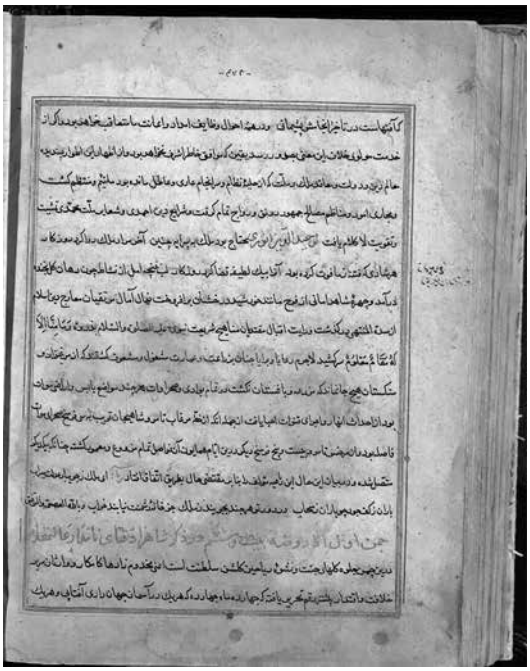
60）Add22380: chaman-i 1 となっている。

61）Add22380: chaman はなく，単に Rawḍa-yi 24 となっている。

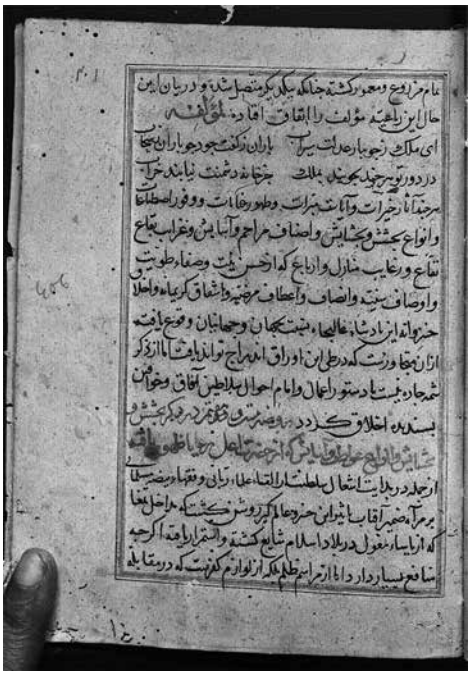
25	Yādgār Muḥammad の即位［350–355］	392a–394a	254b–256a	265a–266b	227a–[228a–b]
	1）Sulṭān Ḥusayn による急襲と Yādgār Muḥammad の死［356–367］	394a–398b	256a–259b	266b–270a	[228b]–231a
26	Sulṭān Ḥusayn の 2 度目の即位［368–375］	398b–401a	259b–261b	270a–273a	231a–232b
	1）Sulṭān Ḥusayn の息子たち［----］	----	----	----	232b–234a
	2）Sulṭān Ḥusayn による建築活動［----］	----	----	----	234a–236a
27	Sulṭān Ḥusayn による諸税の免除とその他の善行［----］	401a–406a	----	----	----

結語［----］	406a–b	----	----	----
書写年［376］	406b	261b	273a	236a

※1. 序文及び各章・節のタイトルには，内容が分かる程度に省略したものを使用している。また，タイトルの後の［］内に，テヘラン版校訂本（tx1）の該当するページ数を示す。
※2. 各写本群の中から，全体が完全な形で残存しているもののうち，書写年代が最も古いものを各バージョンの代表として挙げた。ただし，写本 1 点が存在するだけの D 版は例外とする。
※3. () は，本来あるべき節タイトルが省略されているために，その節の始まり，または前節の終わりが明確ではないことを示す。
※4. (()) は，C 版写本において，他の写本バージョンにある節が省略され，その記述の一部が前の節の中に吸収されてしまっていることを示す。
※5. [] は，D 版写本において，いくつかの葉が欠落しており，そこに明らかに後世書写されたものが代わりに差し込まれていることを示す。
※6. 各写本バージョンの特徴を示す箇所（章や節の有無など）には，網掛けをしている。



↑［写真 2］Daneshgah5745, 232b
（©Ketābkhāne-ye Markazī-ye Dāneshgāh-e Tehrān, Tehran）



↑［写真 1］PSC108, 401a
（©The Library of the Asiatic Society, Kolkata）

採択決定日―2021 年 7 月 30 日

［付録］『天国の諸庭園』未校訂箇所のテキスト

以下では『天国の諸庭園』の未校訂箇所のうち，［校訂 1］ではA 版写本にのみ存在する 27 章（結語を含む）を，［校訂 2］ではD 版写本にのみ存在する第 26 章第 1 節及び第 2 節のテキストを掲載する。テキスト化するにあたって，以下の規則に従った。

- 1 の第 27 章の校訂にあたっては, PSC108（略号：آ）を底本とした。また, Add16704（略語：ب）との照合を行い，異同がある場合には注に示した。
- 2 の第 26 章第 1 節及び第 2 節の校訂にあたっては，この箇所を含む唯一の写本 Daneshgah5745（略号：د）を利用した。なお，明らかに誤りと判断できた綴りに関しては，テキストには訂正したものを提示し，注で写本にある通りの綴りを示した。
- テキストは現代ペルシア語の標準的正書法に基づく。写本では前置詞や動詞の接頭辞，動詞 būdan の現在形 3 人称単数形などが他の単語とつなげてかかれている場合も，本テキストでは原則として分かち書きとした。ただし，韻文部分については，韻律に影響する場合もあるので，写本の綴りをそのまま再現した。
- 本文中のペルシア語詩に関しては，以下のサイトで検索した（https://ganjoor.net）。検索の結果，合致した詩についても，多くは単語など細かい点で異同があった。そのため，脚注で詩人の名前や作品名と共に，このサイトに掲載されている詩をそのまま提示した。

［校訂 1］第 27 章（結語含む），書写年の記述

(آ: ۴۰۱ر؛ ب: ۳۴۴ر)

.... در دور تو هر چند بجویند بملک　　جز خانه دشمنت نیابند خراب

هر چند آثار خیرات و آیات مبّرات و ظهور عنایات و وفور اصطناعات[1] و انواع بخشش و بخایش و اصناف مراحم و آسایش و غرایب بقاع نفّاع[2] و رغایب منازل و ارباع که از حسن نیّت و صفاء طویّت و اوصاف سنیّه و انصاف و اعطاف مرضیّه و اشفاق کریمانه و اخلاق حسروانهٔ این پادشاه عالی‌جاه نسبت به جهان و جهانیان وقوع یافته، از آن متجاوز است که در طی این اوراق اندراج تواند یافت، اما از ذکر شمه‌ای چاره نیست تا دستور اعمال و امام احوال سلاطین آفاق و خواقین پسندیده‌اخلاق گردد.

«روضهٔ بیست و هفتم در ذکر بخشش و بخایش و انواع عواطف و آسایش که از حضرت اعلی به[3] رعایا ظهور یافته»

از جمله در بدایت اشعال[4] سلطنت از القاء علماء ربّانی و فقهاء بیضهٔ مسلمانی بر مرآت ضمیر آفتاب‌تأثیر این خسرو

---

[1] ب: اصطباعات.
[2] ب: تفاع.
[3] در نسخهٔ ب این کلمه نیست.
[4] ب: اشتعال.

عالم‌گیر روشن گشت (ب: ۳۴۴پ) که مداخل تمغا که از یاساء مغول در بلاد اسلام شایع گشته و استمرار یافته، اگرچه منافع بسیار دارد، اما از مراسم[۵] ظلم بلکه از لوازم کفر است که در مقابلهٔ (آ: ۴۰۱پ) وجوه زکوه که یکی از ارکان پنجگانهٔ اسلام است، وضع کرده‌اند، نیّت پادشاهانه بر مراضی سبحانی گماشته، حکم فرمود که آن را بالکلّیّه بر اندازند و هیچ کس پیرامون نگردد و یک دینار از اموال تجّار و غیر تجّار[۶] از اندک و بسیار نطلبند و به علّت باج و خراج و داروغگانه و سوغات و پیشکش و راهداری و سلامانه اصلاً طمعی نکنند و تعرّض نرسانند و جناب مولانا قطب الدین در آن ایّام صدر به استقلال عالی‌مقام بود پروانهٔ همایون به مؤلّف رسانیده به انشاء نشان اشارت نمود و نشانی به انشاء غرّا درست شده بر فراز منابر اسلام خواندند و بشارت این خبر عام به مسامع خواصّ و عوامّ رسانید و مدّت چند سال اصحاب تجارت [و] عملهٔ اسفار آمد و شد کرده به مراد خود سودا و معامله می‌کردند و حرام‌خواران باج و تمغا به دیدهٔ حرمان در ایشان[۷] می‌دید و حسرت می‌خورد که یارای طمع حبّه‌ای نداشتند تا بعد از چندگاه عمّال بطّال و تمغاچیان و ظلمهٔ بدافعال نموده، جمعی از ترکان را که بر درگاه عالم‌پناه راه[۸] مداخلت داشتند، از راه برده انگیز کردند تا فتوی مزوّر به رخصت علماء مزوّر <لامیر خسرو>

حیله‌گرانی که مظالم کنند شرع نبی سخرهٔ ظالم کنند

درست نمودند که مردم صاحب نصاب (ب: ۳۴۵ر) چون در اداء زکوه مال اهمال نمایند، اولو الامر را جایز است که از ایشان به عنف ستانیده در مصالح لشکر اسلام مصروف دارد. روزی باعث (آ: ۴۰۲ر) بر این معنی جناب صدر مذکور فتوی بر این موجب که مسطور گشت، به فقیر داد که بر ظهر آن حکم همایون که می باید نوشت که وجوه زکوه ستانند. مؤلّف از این حال متغیّر شده گفت اگر نعوذ باللّه دستم قلم کنند، به کتابت این نشان دست بر قلم نخواهم نهاد، جهت آنکه نشان بخشش آن را بنده انشاء کرده و بدان مستظهر است که کفارت بسیاری از جرایم گردد و نیز در آخر آن نشان بر این وجه مسطور شده که هر کس بعد الیوم در استمرار این شغل که یکی از مراسم ظلم بلکه از شعایر کفر است، سعی کند یا رضاء دهد، فعلیه لعنة الله و الملائکة و الناس اجمعین. اکنون چگونه در این امر[۹] شروع توان نمود یا رضاء توان داد. فی الواقع این سخن در باطن آن صدر صاحب انصاف تأثیر تمام کرده، چشمها پر آب گردانید و گفت حقّ به طرف تو است، منویس. و دیگر روز صورت این حال بعینه از تقریر این فقیر در عتبهٔ همایون عرض کرد. حضرت اعلی خود از این معنی از تقریر این معنی کراهیّت داشته بودند. به غایت اظهار نفرت فرموده، فرمان داد که مطلقاً پیرامون نگردند و اصلاً مطالبی ننمایند و هیچ کس از این باب سخنی به عرض نرساند که دانسته بخشیده‌ایم و بدین سبب چند سال دیگر این امر مردود معدوم و مفقود بود. بعد از آن دیگر باره فقهاء محیّل به درخواست عمّال جهّال <لامیر خسرو الدهلوی ــنوّر الله قبره‌ــ>

---

[۵] ب: از امر اسم.
[۶] در نسخهٔ ب «و غیر تجار» نیست.
[۷] ب: درویشان.
[۸] ب: را.
[۹] ب: آیین.

دوزخیانی ز ملوک آب‌جوی روی در آتش ز بی آب‌روی

(آ: ۴۰۲پ؛ ب: ۳۴۵پ) هر چه که شه کار پریشان کند آن همه از رخصت ایشان کند

فتویها نوشتند که چون اصحاب نصاب در اداء[۱۰] زکوه شرعی تعلّل جایز دارند، استیفاء آن پادشاه را از لزوم امور سلطنت است و به تدریج مدخل کرده، زکوه شرعی گویان مطالبات فاحش می‌نمایند. حال آنکه زکوه شرعی بر دویست درم پنج درم است، حالا بدان رسیده که اگر مسلمانی به دویست درم یا بویی یا پیر هندویی[۱۱] بخرد، پنجاه درم یا شست درم از وی می‌گیرند. امید که بر رای انور واضح گشته، حکم همایون به دفع آن مطالبات شنیع صادر گردد ﴿و ما ذلک علی اللّه بعزیز﴾.

<دیگر> پیش[۱۲] از آنکه تخت خراسان به فرّ جلوس[۱۳] همایون بلندپایه گردد، مگر در مملکت خوارزم یکی را از متجنّده بی‌ملاحظهٔ مقتضی شریعت مطهّره قتل فرموده بوده، در این ایّام که مسند خلافت به یمن قدم مبارک سرافراز گشت، وارثان آن مقتول به پایهٔ سریر اعلی آمده، طلب خون مورث خود کردند. حضرت همایون چون بر حقیقت حال واقف بود، گریبان مبارک به دست صدق ارادت گرفته انقیاد[۱۴] فرمان شرع نبوی ــعلیه السلامــ را، خود را تسلیم آن جماعه نموده و فرمود که اگر قصاص خواهید، سر می‌نهم و اگر دیت می‌باید، زر می‌دهم و هیچ گونه کلفت و ملالتی در خاطر اشرف نیاورد تا آن جماعه به اخلاص تمام راضی شده، دعاء مزید حیوة آنحضرت لازم اوقات ساختند.

<دیگر> زهی شاهی که دارد چاره‌سازی (آ: ۴۰۳ر) بقادرسوزی و عاجزنوازی

رضای حق بتسلیمی خریده دعائی را باقلیمی خریده

<دیگر> یکی از ارباب اسفزار در مجلسی که قاضی و داروغه و اعیان ولایت حاضر بودند، (ب: ۳۴۶ر) سخنی بی‌ادبانه چنانچه مقتضی عادت رئیسان کلاته است، به نسبت حضرت همایون بر زبان راند که در مقام سیاست جزاء آن سخن اقتضاء قطع لسان می‌گردد[۱۵]. داروغهٔ آنجا که یکی از ایچکیان حضرت اعلی بود، او را گناه‌کار ساخته، محضری در این باب نوشت و مبلغی از او جرمانه گرفت. آن شخص[۱۶] از توهّم آنکه اگر صورت حال به عرض همایون رسد، موجب سیاست عظیم گردد، جسارت نموده شکایت[۱۷] کرد. داروغه محضر به خطوط قاضی و داروغهٔ ولایت به عرض رسانید. حضرت اعلی فرمود که مرا دشنام داده، من او را بحل کردم و عفو نمودم. تو چرا این مبلغ از او گرفته‌ای؟ آن شخص را عذرخواهی فرموده، فرمان داد که داروغه هر چه گرفته، بدو و آن شخص به تشدّد تمام وجوه خود را مع زیاده استیفاء نمود. <لامیر خسرو>

---

[۱۰] ب: ادایی.

[۱۱] معنی «پیر هندویی» مشخّص نیست. ممکن است «پر هندویی» یا «بیر هندویی» صحیح باشد.

[۱۲] ب: پیشتر.

[۱۳] در نسخهٔ ب «به فرّ جلوس» نیست.

[۱۴] ب: ایقاد.

[۱۵] اصل: می‌کرد.

[۱۶] ب: شخصی.

[۱۷] در نسخهٔ ب «گردد، جسارت نموده شکایت» نیست.

عذر ز عاصی بود اندر گناه طرفه که ما عاصی و او عذرخواه

خنده زند در رخ هر جرم‌کار گوهر ازین گونه کند آشکار

<دیگر> وجوه سرشمار بدعتی بود که خسروان ماضی و پادشاهان سلف با وجود کثرت مداخل و قلّت مصارف دستور ساخته، سال به سال بلکه ماه به ماه از رعایا به ستم می‌گرفتند و متغلّبان مواضع بدخوی گشته، (آ: ۴۰۳پ) هر خرجی که واقع شدی، بر سر شمار توجیه می‌کردند و رعیّت همیشه سر کوفته و سر گشتهٔ این بدعت می‌بودند. چون بر آئینهٔ رای سلطانی صورت این حال روشن گشت، حکم فرمود که هیچ کس اصلاً بدین جهت از کلّی و جزوی مطالبتی ننماید و نسخها و دفترهای آن را بسوختند و این ظلم شنیع از سر رعایا بالکلّیّه مندفع گشت و نهال این ستم پر و بال که پر و بال به همه جا باز (ب: ۳۴۶پ) کرده بود، از باغ مملکت منقلع شد.

<دیگر> از قوانین محدثه وجوه مواشی بود که هر سال بر سر هر درازگوش و درازدنبالی مبلغی که موازی قیمت آن مواشی بود، می‌گرفتند از عجزه و بیوه‌زنان و مدّت مدید بر این گذشته و مستمرّ گشته، از آنجا که مقتضیات مراحم سلطانی است، حکم فرمود که آن را از تمامی ممالک بر انداخته نطلبند و نستانند. لا جرم عوض هر نفرین که از ضعفاء و مساکین نسبت به سلاطین ظلم‌آئین صادر می‌شد، اکنون چندین هزار فاتحه و دعاء خیر به ذروهٔ چرخ برین می‌رود. العدل میزان اللّه بین العبّاد و هی فی الآخرة خیر الزاد.

<دیگر> نامبردار[۱۸] قشونی از زمان خواقین پیشین معهود گشته بود که هر گاه به دفع[۱۹] دشمنی یا قصد مخالفی لشکری کشیدی، در بلده و بلوکات و ولایات هر کس را که حسن حالی و اسباب و مالی گمان می‌بردند، به لشکر می‌نوشتند و جمعی دیگر را با او شریک می‌ساخت تا تهیّهٔ اسباب و یراق مهمّات (آ: ۴۰۴ر) آن کس نموده به لشکر روان ساختی و این صورت در هر مدّتی یکبار اتّفاق افتادی. بعد از آن به سبب علّت قلّت مداخل ملک و کثرت ظهور مخالفان و اطماع فاسده دستور شده بود که هر ساله لشکری توجیه می‌یافت. حضرت سبحانی این پادشاه مرحمت‌پناه را سعادت توفیق ارزانی فرمود تا ابواب این ظلم را مسدود گردانیده از مملکت بر انداخت و مسلمانان را از تعرّض و مزاحمت این بلاء خلاص ساخت. التوفیق شیء عزیز لا یعطی الاّ لعبد عزیز. <للشیخ سعدی>

ملک را همین ملک‌پیرایه بس که راضی نگردد بآزار کس

کسی نیک بیند بهر دو سرای که نیکی رساند بخلق خدای

<دیگر> از قوانین پیشین و بدعتهای دیرین نامبردار جهادی (ب: ۳۴۷ر) بود که در زمان سابق اسباب و جهات و ضیاع و متملّکات مردم را قیمت کرده، بنیجه‌ای ساخته بودند و دستور العملی راست کرده که هرگاه لشکری واقع شدی یا پادشاه ملک را ضرورتی پیش آمدی، مبلغهای کلّی بر سر آن بنیجه توجیه نمودی و به تشدّد تمام از رعایا حاصل کردی و با آنکه در

---

[۱۸] ب: امیردار.

[۱۹] در نسخهٔ ب به جای «به دفع»، «رفع» نوشته است.

آن بنیجه تغییرات کلّی و تفاوت فاحش راه یافته بود و اگر آن ضیاع ضایع شده و املاک هلاک و مالکان نابود شده، از پی در می‌آمدند و وارثان را می‌گرفتند و خلل وافر و تفرقهٔ عظیم به خلایق می‌رسید چنانچه چندین خاندانها در سر جهات نابود (آ: ۴۰۴پ) جهاد می‌رفت تا در این ایّام به سعی و اهتمام این آصف عالی‌مقام وحشت این ظلم بدفرجام بر ضمیر حضرت پادشاه سکندراحتشام واضح گشته به دفع و رفع آن فرمان داد و احکام مطاعه در باب بخشش نامبردار جهادی به قلم منشیان بلاغت شعار سمت تحریر یافته، به اطراف ممالک فرستادند و آن بنیجه مردود مذموم بر افتاد و سبب درجات نیکنامی آمر[۲۰] و ساعی گشت. <نظم>

هر آن کس که در دست فرمان او زمام خلایق نهد کردگار

همان به که کوشد بنام نکو که آن ماند از خسروان یادگار

<دیگر> از جهت اموال سر درختی زحمت بسیار به حال رعایا و سکنهٔ بلاد و دیار می‌رسد[۲۱] به سبب آنکه عمّال بدکردار که به حرز مواضع نامزد می‌شدند، جهت اطماع فاسدهٔ خود هر نوع درختی که در باغات مسلمانان دیدی از نو و کهنه و بارور و بی‌بر، در دفتر جمع نمودی و زیاده از معهود بلکه بیشتر از مقدور بار کردی تا سیاههٔ ایشان چون نامهٔ اعمال عاصیان سیاه و گران‌بار گشتی، مدّعا آنکه در وقت قرار غرض خود حاصل (ب: ۳۴۷پ) کردی و اکثر آن بودی که ناراستی و بدفعلی ایشان بر نوّاب دیوان اعلی ظاهر شده، سیاهه از ایشان بگرفتی و به دفترخانه سپردی و آن بارهای گران بر جان مسلمانان بماندی. در این وقت فاید[۲۲] توفیق سبحانی عنان عنایت حضرت سلطانی را به سر حدّ این حال کشید تا بر حقیقت آن اطلاع یافته، مال سر درختی (آ: ۴۰۵ر) بلوکات را به تمام از خالصه و خاصّهٔ شریفه و عشری و غیره بخشش فرمود و حکم همایون نافذ شد که مضمون فرمان قضاجریان را در سنگ کنده در دیوار مدارس جدید سلطانی استوار سازند که من بعد هیچ کس پیرامون نگردد و یک دینار و یک من بار از این جهت نطلبند و بلغتهای بلیغ موکّد گردانید. رجاء واثق که توفیق الهی مساعدت نماید که از تمامی ولایات بخشش یابد که مردم ولایات نیز بندهٔ خدا و رعیّت پادشاهند و رعایت حال ایشان از موجبات درجات دو جهانی و لوازم امور سلطنت و جهان‌بانی.

<نقل است> که در زمان یکی از خلفاء بنی عبّاس غالبا امیر المؤمنین مهدی در محلّهٔ کرخ بغداد آتش افتاد و خانهای مردم بسوخت و عمارتها ویران گشت. مردم آن محلّه صورت حال پیش وزیر خلیفه عرض کرده عجز و اضطرار خود باز نمودند. وزیر خداترس از سر ترحّم و نیّت خیر کیفیت عرضه‌داشت[۲۳] موقف خلافت کرده حکم یافت که سیصد هزار درم یا دینار جهت عمارت خانهای رعایا از خزانه دهند. هم[۲۴] در این روز مردم فرغانه به عرض وزیر رسانیدند که بند آب ولایت ایشان شکسته و

---

[۲۰] ب: امر.

[۲۱] ب: می‌رسید.

[۲۲] ب: فایده.

[۲۳] ب: عرض‌داشت.

[۲۴] در نسخهٔ ب این کلمه نیست.

دیار ایشان (ب: ۳۴۸ر) از آن شکست بی‌آب گشته و کشتی آمال ایشان بر خشک مانده و صد هزار دینار جهت عمارت آن بند می‌باید و رعایا از تدارک آن عاجزند. وزیر مشفق شرح حال پیش خلیفه بر طبق عرض نهاد و گفت صد (آ: ۴۰۵پ) هزار دینار ضرورت است دادن. بر خاطر خلیفه گران آمده گفت در این روز سیصد هزار دینار جهت مردم کرخ ستانیدی اکنون صد هزار جهت[۲۵] مردم فرغانه می‌خواهی. وزیر نیکوخواه پند از زبان نصیحت بر داشته گفت ای خلیفه انّ اللّه یسالک عن اهل فرغانة کما یسالک عن اهل بغداد، یعنی خدای تعالی از تو از اهل فرغانه همچنان سؤال خواهد فرمود که از اهل بغداد، چه هر دو مُلکِ خلیفه است. چون این سخن از بهر حقّ و از سر صدق بود، در دل خلیفه اثر عظیم کرد و حکم فرمود که صد هزار دینار جهت مردم فرغانه از نقود خزانه تسلیم نمایند.

هر که شاه آن کند که او گوید حیف باشد که جز نگو گوید

<دیگر> در وقتی که اغراس باغ جهان‌آرای می‌فرمود، جمعی از باغبانان و کارگزاران باغ چند نهال سرو که چون طبایع قافیه‌سنجان راست و چون همّت آزادگان بلند بود، در باغچهٔ سکندر بیک نشان یافتند. آن نهالها را چون شجرهٔ عمر دشمنان از بیخ کنده بردند و در باغ همایون بر کنار ﴿ انهار من ماء غیر آسن﴾[ق ۴۷: ۱۵] در جائی که جای آن بود، نشاندند. بعد از مدّتی که آن نهالها بیخ استوار کرده، در مقام نشو و نما در آمد و تن‌آور و سایه‌گستر گشت. سکندر بیک مفلوک به عرض رسانید که بی‌اذن و رضاء او چند نهال از باغچه که در تصرف داشته، کنده‌اند و در (آ: ۴۰۶ر؛ ب: ۳۴۸پ) باغ جهان‌آرای نشانده و خاطر پیر بیک فقیر به جانب آن سروهای متمایل مایل است. باقی حکم پادشاه را است. چون بر رای جهان‌آرای واضح گشت که بی‌رخصت پیر قلع نهالهای او کرده‌اند، ملول خاطر گشته، بعد از عتاب بر آن جماعت فرمود که به ضعف قیمت نهالها رضاء خداوند بجویند. پیر بیک که به یک درم هزار شلنگ زدی، در مقام ابرام ایستاد و به اضعاف ثمن رضاء نداد و عین مدّعاء خود طلبید. حضرت اعلی بی‌کراهیت‌طبع بلکه از سر رضاء تمام فرمان داد که نهالهای خود را از باغ سلطانی همچنانکه از باغچهٔ او کنده بودند، از بیخ بر آورده برد و به جای خویش نشاند. <بیت>

دهقان عدل شه همه تخم وفا فشاند[۲۶] بیخ ستم بکند و نهال کرم نشاند

<دیگر> از رسوم محدثه و قوانین مستدعه که مدّتها در میان عجزه شایع گشته بود و منظور عوانان بلکه دستور عمل‌داران ستم‌پیشه شده و در ایّام دولت خجسته‌فرجام این پادشاه اسلام‌پناه محو و مردود گشته و بر افتاده و قواعد سنیّه و مراسم پسندیده که در مقابلهٔ آنها ابداع و اختراع یافته، زیاده از آن است که این اوراق احتمال تفاصیل آن تواند نمود.

چون این اجزاء مطوّل و محجّم گشت، لایق چنان نمود که بیان بعضی حالات دیگر از ذکر عمارات بهشت‌آئین حضرت اعلی و شاهزادها و بعضی امرا و شرح طویها و جشنهای بزرگ که در زمان خلافت همایون این پادشاه مرحمت‌پناه (آ: ۴۰۶پ) واقع شده و صوادر افعال و نوادر احوال دیگر از ابتداء سنهٔ تسعمائه اگر زمان امان دهد و اجل مهلت (ب: ۳۴۹ر) بخشد، به

---

[۲۵] ب: برای.

[۲۶] ب: نشاند.

تأیید دولت حضرت پادشاهی در دفتر دیگر مسطور و مبیّن گردد. وللّه الطاف بنیل الامانیا[۲۷].

امیدواری به کرم مطالعان این اوراق آنکه اگر از مطالعهٔ این سطور فیضی یابند، مؤلّف را به دعاء خیر یاد فرمایند و اگر بر عیبی و سهوی مطّلع کردند، به کمال لطف خود عفو نمایند. و العفو عند کرام الناس مقبول.

تمّت الکتابة بعون اللّه و حسن توفیقه

(آ): فی العشر الاوسط من ذی الحجّة الحرام

سنة احدی عشر و تسعمائة

(ب): فی یوم السبت یازدهم

من ماه ذو القعده

سنه ۱۰۰۲

［校訂 2］第 26 章第 1 節及び第 2 節

(د:۴۷۳) **«چمن اوّل از روضهٔ بیست و ششم: در ذکر شاهزادهای نام‌دار عالی‌مقدار»**

در این چمن جلوهٔ گلهای جنّت و نشوهٔ ریاحین گلشن سلطنت است اعنی مخدوم‌زادهای کامکار و وارثان سریر خلافت و اقتدار بیشتر رقم تحریر یافته که چهارده ماه چهارده که هر یک در آسمان جهان‌داری آفتابی و هر یک (د:۴۷۴) در میدان شهریاری افراسیابی‌اند، از صلب همایون حضرت اعلی ظهور یافته که حالا اطراف و اقطار ممالک از لمعات انوار مرحمت و معدلت ایشان روشن است، هر یکی در ملک‌داری سنجری و اسکندری و هر کدام در فرمان‌دهی و کشورستانی روی شهری و پشت لشکری.

<اوّل> شاهزادهٔ عالمیان علی الاطلاق وارث سریر سلطنت به ارث و استحقاق <مثنوی>

کمین مولای او صاحب کلاهان بخاک پای او سوگند شاهان

جهان اندازهٔ عمر درازش سعادت یار و دولت کار سازش

خلاصهٔ عناصر عدل و احسان معین السلطنة و الدنیا و الدین بدیع الزمان بهادر که در مملکت جرجان و طبرستان تا سر حدّ آمل و ساری و نواحی آن که تختگاه قابوس و فلک المعالی بوده، در تصرّف نوّاب دیوان و حیطهٔ تملّک ملازمان آن حضرت

---

[۲۷] ب: الانیا.

است. <لفردوسی>

همیشه پناهش جهان‌دار باد سر دشمنانش نگونسار باد

بماناد تا جاودان[۲۸] نام او همه بهتری باد فرجام او[۲۹]

<دیگر> دو نیّر[۳۰] برج نامداری و دو گوهر درج کامکاری <بیت>

دو چشم و چراغ اهل بینش دو گلبن باغ آفرینش

عمدتی بنیان النصفة و العدالة قرّة عیون اعیان المملکة و الجلالة <بیت>

بر افرازندهٔ اورنگ شاهی حوالتگاه تأیید الهی

ابو الفوارس شاه غریب بهادر و ابو المنصور مظفّر حسین گورکان به اتّفاق یکدیگر به نظم و نسق امور مملکت غوررسی مظلومان و اشاعت مراسم عدالت قایم مقام و نایب مناب حضرت اعلی خلافت‌انتسابند. [<لنظامی>]

خدایا تا جهان را آب و رنگست فلک را دور و گیتی را درنگست

فلک را یار آن صاحب قران کن جهان را رام این گیتی‌ستان کن[۳۱]

<دیگر> فروغ دیدهٔ سلطنت و چراغ دودهٔ خلافت، درّ صدف شاهی و شهریاری، درّی شرف سعادت و بختیاری، <لغیره>

ندیدست چشم جهان هیچ که ز شاهان گیتی چنان صفدری

همی گوید اندر کفش ذو الفقار جهان را ز سر زنده شد حیدری

نیّر سپهر عزّت و علا، ابو الفتح حیدر محمّد میرزا که تختگاه سلطان ابراهیم ــقدّس اللّه سرّهــ یعنی قبّة الاسلام بلخ و شبرغان تا سواحل آب جیحون در تحت فرمان دارد. <بیت>

دعای نیکوخواهانش قرین باد (د:۴۷۵) خدایش ناصر و دولت معین باد

<دیگر> دو ماه فلک اقبال، دو نهال گلشن عزّت و جلال، دو زبدهٔ ارکان سلطنت و دو عمدهٔ بنیان مملکت، <بیت>

دو طغرای منشور فرمان‌دهی دو شایستهٔ تاج شاهنشهی

بلی سلطان ابو تراب بهادر که شمه‌ای از آثار شجاعت و بسالت او مذکور شد و دیگری شاهزاده محمّد حسین میرزا در مملکت عراق به قضاء ملک خلاق جهت تسخیر آن دیار پابسته مانده‌اند. <بیت>

بعالم هر دو را دایم بقا باد همه کام موادشان روا باد

<دیگر> صورت رحمت الهی، مهبط آیت پادشاهی، نگین خاتم دل‌آوری، محیط مرکز بهادری، <بیت>[۳۲]

---

[۲۸] اصل: جاویدان.

[۲۹] فردوسی، *شاهنامه*، پادشاهی اردشیر: بماناد تا جاودان نام اوی / همه مهتری باد فرجام اوی.

[۳۰] اصل: نیز.

[۳۱] نظامی، *خسرو و شیرین*، بخش ۷، در ستایش طغرل ارسلان: خدایا تا جهان را آب و رنگست / فلک را دور و گیتی را درنگست // جهان را خاص این صاحبقران کن / فلک را یار این گیتی ستان کن.

[۳۲] اصل: دیگر.

جهان را چه باران ببایستگی روان را چه دانش بشایستگی

عون السّلطنة و الدین ابو المحسن بهادر تختگاه سنجری اعنی بلدهٔ مرو شاهیجان تا حدود خوارزم و اران به فرّ تمکین و حراست مبارکش منوط است. <بیت>

برازا بادش از لطف الهی قبای بخت و تاج پادشاهی

<دیگر> بدر طارم جهان‌گشای، واسطهٔ عقد فرمان‌روایی، دیباچهٔ اوراق دین‌پروری، مجموعهٔ اخلاق عاطفت‌گستری <لمولانا ریاضی>

دل پاکش که هست از کبر معصوم بهیجا آهن و در بارجا موم[۳۳]

شاهزاده محمّد معصوم بهادر به ضبط و ایالت مملکت نیمروز و جولانگاه پور دستان مامور است. <لفردوسی>

بماناد تا جاودان[۳۴] افسرش مبیناد بی او کسی کشورش

<دیگر> گوهر کان خلافت، نتیجهٔ ارکان مرحمت، فرزانهٔ رایت ایالت، فروزندهٔ کوکب عدالت،

که شمشیر هندی چو از باختر بر آرد رسد موج خون تا بخاور

شاهزاده ابراهیم حسین بهادر والی قندهار و داور ملک زمین داور و باختر زمین است. <بیت>

سرش سبز باد و تنش ارجمند گذشته مقامش ز چرخ بلند

ثمرهٔ شجرهٔ سلطانی، تمیمهٔ وشاح ملک‌داری و جهانبانی، صدر الجریدة[۳۵] محاسن اخلاق، بیت القصیدة[۳۶] مکارم اعراق <بیت>

گل رعنائی باغ پادشاهی خرامان سرو گلزار الهی

<دیگر> شاهزاده محمّد محسن بهادر حفظ و حراست و ضبط و سیاست ابیورد و نسا و درون و یازر و توابع و ضمائم آن <لمولانا ریاضی>

ممتّع باد هم از تخت و از تاج بتاج تخت او اقبال محتاج

جمعی دیگر از شاهزادهای عالی‌تبار و بلنداختران رفیع (د:۴۷۶) مقدار که هر یک در طارم جهان‌داری ماهی و بر مسند شهریاری پادشاهی‌اند <بیت>

سریرآرای ملک بختیاری برازای لباس تاج‌داری

فریدون حسین میرزا و فرّخ حسین میرزا و ابن حسین میرزا و محمّد قاسم میرزا چون چهار قایمهٔ سریر سلطنت ارجمند ملازم بارگاه فردوس‌مانند حضرت همایونند. <لعبد الواسع>

تا بر زمین بود همه افلاک را مدار تا بر فلک بود همه اجرام را خمر

---

[۳۳] از شعر امیر خسرو: دل پاکش که هست از کینه معصوم / بهیجا آهن و در بارجا موم.

[۳۴] اصل: جاویدان.

[۳۵] اصل: الجریدهٔ.

[۳۶] اصل: القصیدهٔ.

افلاک را مباد جز آثارشان مدار اجرام را مباد جز اقبالشان اثر

<دیگر> از اولاد اخوان و اقرباء و اخلاق فرزندان سعادت‌انتما بسیارند که سزاوار ملک‌داری و شایستهٔ خلعت شهریاری می‌توانند بود که اگر به احصاء و استیفاء آن شروع رود، به اطالت می‌انجامد. حضرت سبحانی روز به روز دولت و جمعیّت مجموع را در تزاید و تضاعف داراد و همه را از عمر و جوانی و روزگار سعادت و کامرانی ممتّع[۳۷] و بر خوردار گرداناد بحرمة محمّد و آله.

«چمن دوم از روضهٔ بیست و ششم: در بیان بعضی عمارات و مبانی خیرات حضرت سلطانی»

اگرچه آثار خیر و آیات برّ حضرت سلطانی سلیمان‌مکانی زیاده از آن است که در حیّز بیان آید، امّا ذکر بعضی که سبب زینت کتاب و موجب رواج مملکت و فراغ حال اهالی علم و ارباب استحقاق است، مناسب بلکه واجب می‌نماید. از جملهٔ غرایب عمارات و بدایع امارات که ابداع همّت بلند و اختراع خاطر ارجمند حضرت اعلی است، وضع غریب و طرح عجیب باغ جهان‌آرای و قصر دلگشای آن است چنانکه شمه‌ای از بیان بناء آن مذکور شد که از او هر خشتی بهشتی و هر قدمی ارمی و هر چمنی گلشنی و هر شکوفه‌ای اختری و هر گوشه‌ای روضه‌ای و هر حوضی کوثری است <لمولانا ریاضی>

جهان‌آرا مگو خرّم بهشتی ازو کاخ فلک فیروزه خشتی

ز قصر عالیش هر در که شد باز دهد آن در بسوی روضه آواز

ز روشن روزنش هر شیشه پاره چو عینک گشته بر چشم ستاره

هر خوازه‌ای از طاق رواقش ایوان آسمان را قالبی و هر صنوبری از چمنهایش فلک را ستونی، و هر شکوفه‌ای کوکبی را است چمنهای اطرافش (د:۴۷۷) از انواع ریاحین را است چون راه مجرّه بر فلک برین و عقود ثمار و عنقود اعنابش چون حمایل جوزاء و خوشهٔ پروین[۳۸]، از لطافت آب صفوت‌مآبش چشمهٔ خضراء را دهان بر آب آمده[۳۹] و از شعشعهٔ شمسهٔ ایوان کیوان‌جنابش پیکر آفتاب در تاب و اضطراب رفته، از غرابت حوض مینافام و ماهیان سیم‌اندامش ماهیّت ماهی حضر و عین آب حیوان معیّن شده و از تصویر بروج اثنی عشر که قلم مصوّران مانوی‌اثر در قصر فلک‌منجرّش رقم کرده‌اند، از فحوی ﴿و السّماء ذات البروج﴾[ق ۸۵: ۱] مبیّن گشته، چون لطایف نقوش و عجایب سقوف و فروش و مساکن[۴۰] تابستانی و اماکن زمستانی و لطافت آب و هوا و سماحت ساحت و فضاء و میوهای غریب و شکوفهای عجیب و گلهای رنگ به رنگ و گونه گون، طلسم و نیرنگ و طُرق غُرف مَبنِیّه و مبانی مثانی سفیله و علویه و ابداعات لطیف و اختراعات آن مقام کریم به غایتی است که قلم از تحریر و بیان از تقریر آن به عجز و قصور معترفند، تطویل را در توقّف داشته حواله به رؤیت می‌رود <بیت>

---

[۳۷] اصل: ممتنع.

[۳۸] معنی و ترتیب این جمله‌ها مشخّص نیست. شاید از «و هر شکوفه‌ای» تا «پروین» چند کلمه افتاده باشد.

[۳۹] معنی این جمله مشخّص نیست. ممکن است «چشمهٔ خضر از ادهان پر آب آمده» صحیح باشد.

[۴۰] اصل: مساکین.

گر کسی را شبهه‌ای باشد درین گو بیا اینک بچشم خود به بین

از منازل کریم و مبانی عظیم در جانب شمال باغ مذکور مدرسهٔ عالی‌بنیاد و لنگر معمور نعمت‌آباد است که بانی همّت رفیع سلطانی عمارت فرمود، مدرسه‌ای[۴۱] در غایت رفعت و عظمت و لنگری محتوی به انواع نزل و نعمت چنانچه نهر نو در صحن مدرسه می‌گذرد و چون از بلده تا آنجا مسافتی فی الجمله بود و طلبهٔ علم را از فواضل خیرات حضرت سلطانی زیاده احتیاجی نه، به جهت موانع سرما و گرما و گل و بارندگی در تردّد بدانجا مولع و مشعوف نبودند، اتمام مدرسه را در توقّف گذاشته، لنگر نعمت‌آباد معمور گشت و دایم الاوقات جمعی از کمربستگان اهل طریق به خدمت صادر و وارد در آن بقعه مشغولند چنانکه هر سال مبلغهای گرامند به ما حضر و سفرهٔ اصحاب سفر و حضر و باقی مصارف دیگر صرف آنجا می‌شود.

<دیگر> خانقاه مسافرپناه چهارسوی دار السّلطنة هرات که به نیّت روحانیّت حضرت رسالت ــصلّی اللّه علیه و سلّمــ بنا یافته و مبلغهای دیگر به وظایف و رواتب و رعایت فقرا و یتامی و ارامل در آن بقعهٔ شریفه مصروف می‌گردد و هر صباح جمعه به سبب افاضت واعظ شیرین‌کلام اعنی جناب فضیلت‌مآب مولانا کمال الدین حسین کاشفی مجلسی با ازدحام تمام در آن مقام با احتشام منعقد می‌گردد و فیض و فواید و موابد لا کلام از آن منزل کثیر الاحترام (د:۴۷۸) به طوایف خواص و عوام می‌رسد.

<دیگر> از بقاع نفّاع مزار بزرگواری است که در شارع خیابان جهة والدهٔ کریمهٔ مرحومهٔ خود بنا فرموده‌اند مشتمل بر انواع بدایع و اصناف مداخل و روایع و هر ساله مبلغی دیگر روز به روز و ماه به ماه به رواتب و وظایف و سایر مصارف آن مستغرق می‌شود و مردم بسیار از آن بقعهٔ فیض‌آثار منتفع می‌گردد.

<دیگر> از مبانی خیرات پل و رباط منفعت‌مآب کنار آب سنجاب است و رباط افاضت‌ارتباط سلطانی قریب به درهٔ رنگی در ولایت بادغیس مشتمل بر دکّان و حمّام و منافع لا کلام که در مواضعی اتمام یافته که هر سال چندین مردم غریب و مسافر در آن نواحی از جهة برف و سرما و قطاع الطریق تلف می‌شدند چنانچه یک نوبت محرّر بعد از نوروز به چندین روز در نواحی سنجاب عبور می‌نمود، چندین مردم و حیوانات در آن راه دید که از سرما مرده بودند و افتاده. حالا به سبب این عمارات همه آن موضع معمور و مردم‌نشین شده و رواتب و وظایف جهت غایب و حاضر و مقیم و مسافر و خادم و مجاور و غیر ذلک تعیین یافته تا ابناء سبیل به فراغ خاطر و اطمینان باطن آمد و شد می‌کنند و از آن آثار خیر و ابواب برّ بهره‌مند می‌کردند.

<دیگر> از عجایب ابنیه و بدایع بقاع مبنیه که از سبع شدّاد رفیع‌تر و از ارم ذات العماد منیع‌تر است، مدارس جدیدهٔ همایون سلطانی است که مهندس همّت گردون‌عدیل در سواد بلدهٔ میمونهٔ هرات به موضع سر پل انجیل ابداع فرموده، چهار مدرسه به یکدیگر متّصل و متداخل، هر یک از بیت معمور مثالی و از سقف مرفوع نموداری، بقعه‌ای که هرگز مهندس را مثل آن در خاطر نگشته و طرحی که هیچ مؤسّس را شبههٔ آن در ضمیر نگذشته، آب نهر انجیل که طیره‌گر عین سلسبیل است، در میان این مدارس جاری مجری ﴿جنات تجری من تحتها الانهار﴾[ق ۴۷: ۱۲ و غیره] گشته، یک مدرسه به هیئات عظیم

---

[۴۱] اصل: مدرسه.

مرغوب و متبوع از جانب شرقی نهر مذکور و دو بقعهٔ دیگر از طرف غربی و ایوانهای دراز هر دو جانب محاذی یکدیگر به منزلهٔ دو صفّه در برابر یکدیگر چنانکه ما بین این هر دو عمارت شکل مدرسهٔ دیگر پیدا کرده در غایت لطافت و شارع خیابان در این میان و نهر انجیل در میان شارع روان <لامیر خسرو>

همچو عروسی شده آراسته آینه از آب روان خاسته

همچو دو آئینه مقابل ز تاب آب درو عکس‌نما او در آب

و آنچه از عجایب آلات و غرایب ادوات در آن عمارات به کار رفته و می‌رود، (د:۴۷۹) زبان از بیان آن قاصر و قلم از شرح آن عاجز است. از جمله حوض سنگین به صورتی تراشیده در میان صحن مدرسهٔ شرقی است که کیفیّت تکلّف و عظم آن را هیچ مهندس به وساطت بیان در نتواند یافت مگر به مشاهده و عیان و مشتمل است این مدرسه چون بهشت مثمّن بر هشت صفّهٔ علیّه و بیوتات سفلیه و علویه، مفرّق به طلا و لاجورد و منقّش به اصناف الوان از سبز و سرخ و زرد و از جانب غربی دو مدرسهٔ پهلوی یکدیگر به طرح بدیع و بناء رفیع، ما بین هر دو جنبدی که جهت مضجع همایون اتمام یافته، به صفت القبر روضة من ریاض الجنّة موصوف و به لطایف تنسوقات از لکنها و شمعدانها و پیه‌سوزها و غرایب اسلحه از هر جنس زرّین و سیمین و غیر ذلک آراسته و چهار منار از هر دو جانب مقابل یکدیگر بناء یافته، هر یک موازی بیستون ستون سموات بی‌ستون شده <و منه>

سقف فلک کز کهنی شد نگون در ته او داشته هر یک ستون

از پی بر رفتن هر آسمان کرده زمین تا بفلک نردبان

فی الواقع هر مبصّر که مشاهدهٔ این بقاع کیوان‌ارتفاع نموده باشد، هر چند صفتی در غایت اتّساع و تعریفی در کمال اغراق شنود، از قبیل مجاز لا طائل تحته خواهد شمرد. چه حدّ لطافت و حالت و غایت غرابت و جلالت آن جز به مشاهده و معاینه مفهوم نمی‌گردد <لسلمان>

خاک را شاه رسانید بجای امروز که بصد پایه بر افراخت سر از علّیّین

در خلال این اوقات خواجه رستم نام مرد جهان دیده، عالم نوردیده، از پیش والی روم به خراسان آمده بود و پیشکشها و تحفها جهت حضرت اعلی و ارکان دولت قاهره و اعیان و متعیّنان بلدهٔ فاخره آورده، مؤلّف را با او ملاقات افتاد. تقریب سخن منجر به آن شد که از او سؤال کرد که مثل این عالی‌مقام بقعه‌ای در هیچ مملکتی مشاهده افتاده. جواب داد که از اقاصی روم تا نواحی مصر و شام و هند و غیر ذلک هر جا مکانی رفیع‌بنیان و بقعه‌ای عالی الشأن[۴۲] نشان داده‌اند، به تفرّج آن منازل و مراحل پیموده‌ام، مثل این منزلی در هیچ مملکتی ندیده‌ام، شبیه آن از هیچ جهان‌پیمایی نشنیده. <لامیر خسرو__رحمه اللّه__>

طاق بلندش بفلک گشته جفت داخل او گشته فلک در نهفت

گر شنود وصف وی از داستان مکّه شود طائف این آستان

---

[۴۲] اصل: علی الشان.

و اکنون به میامن عواطف حضرت سلطانی در این منازل نورانی (د: ۴۸۰) از اجتماع علمانی و حفظهٔ قواعد مسلمانی و طلبهٔ علوم و اهالی وظیفه و مرسوم و غلبهٔ موالی و سکنهٔ حوالی جمعیتی است که در بیان نمی‌گنجد. <لغیره>

همایون بقعه‌ای همچون ارم جان‌پرور و خرّم مبارک بارگاهی همچو گردون عالی و والا

بهشتش خواند عقل از روز اوّل باز بهر آن که آبش آب کوثر بود و خاکش عنبر سارا

<دیگر> از بقایع متبرّکهٔ همایون مسجد جامع دار العبادة زیارتگاه است که ذکر آن پیشتر گذشت و از رقبات و محدودات و قری و مزارع و قنوات و منازل و دکاکین و مستغلات و هر گونه جهات بر این بقاع آن مقدار وقف شده که حالا هر سال موازی صد تومان کپکی حاصل وقف است که به روابت و وظایف و علوفهٔ مباشران مهمّات و سایر مصارف آن مصروف می‌گردد.

<دیگر> از مساجد و معابد و مقابر و حظائر رسمی به اشارت همایون چندان احداث یافته و عمارت پذیرفته که از حدّ حساب و شمار متجاوز است و در تمامی بلده و بلوکات و قصبات و ولایات هر جا بقعهٔ خیری بوده که به عمارت احتیاج داشته تا وقف و ادراری بر آن معیّن نبوده، حسب الحکم به حال عمارت رسیده و اسباب خوب و محدودات و مستغلات مرغوب بر آن وقف فرموده که به تفصیل عرض آن کردن به طول می‌انجامد. <لشیخ سعدی>

همه عاطفت [سیرت] خویش کرد درم داد تیمار درویش کرد

بنا کرد و نان داد و مسکین نواخت شب از بهر درویش کاشانه ساخت[۴۳]

اللهّم تقبّل حسناته و خلد الی یوم القیام آثار

خـــــــــــــــــــیـراتـــه

تمّت و بالخیر

عمّت

م

جری علیه القلم بعد ما کان متروکا من القدم فی خلال محرم سنه ۱۱۸۷ هـ.

---

[۴۳] سعدی، *بوستان*، بخش ۱۶، حکایت برادران ظالم و عادل و عاقبت ایشان: یکی عاطفت سیرت خویش کرد / درم داد و تیمار درویش خورد // بنا کرد و نان داد و لشکر نواخت / شب از بهر درویش، شبخانه ساخت.